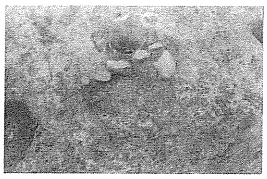
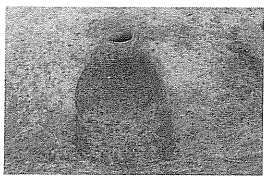
17号住居跡（南→）

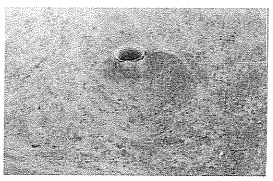
18号住居跡（南→）

図版10

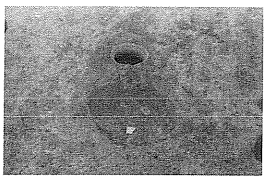
19号住居跡（南→）

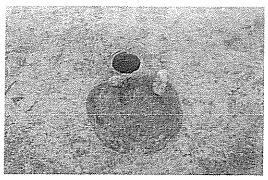

2 号住居跡炉

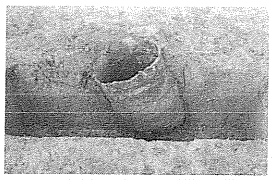

3 号住居跡炉

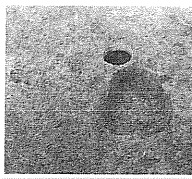

4 号住居跡炉

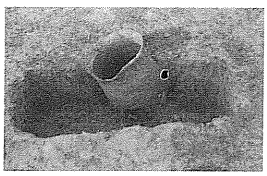
5 号住居跡炉


7 号住居跡炉

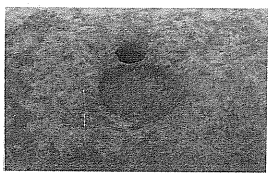

8 号住居跡炉

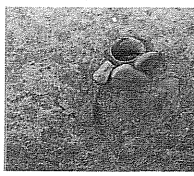

9 号住居跡炉

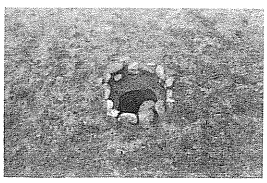

10号住居跡炉

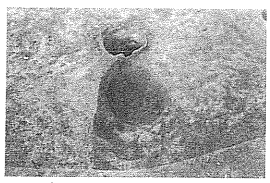

11号住居跡炉

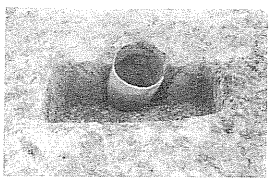
12号住居跡炉

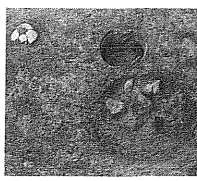

13号住居跡炉


14号住居跡炉

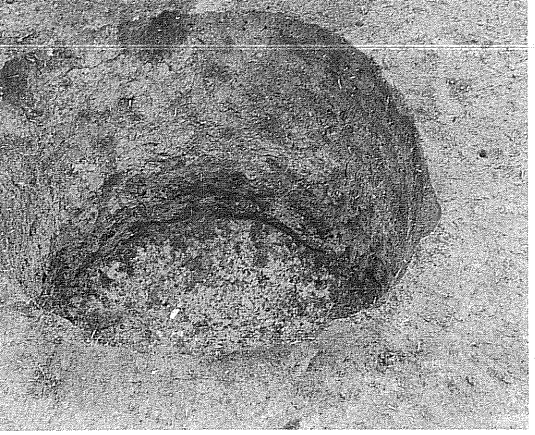

15号住居跡炉


16号住居跡炉


17号住居跡炉


19号住居跡炉

図版11

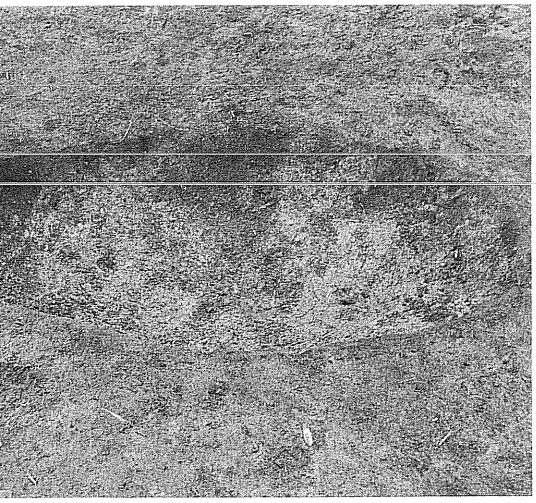


3号土坑（南→）

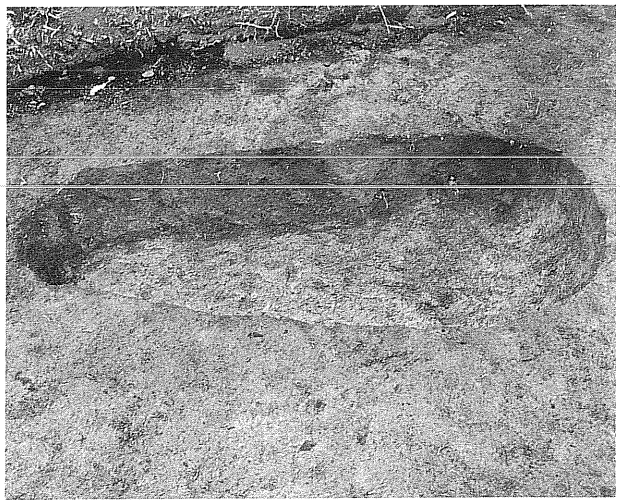
4号土坑（南→）

7号土坑（南→）

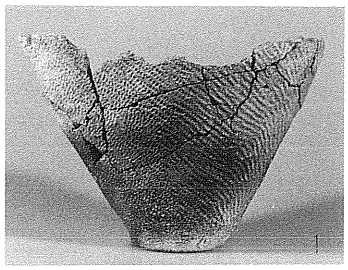
13号土坑（南→）

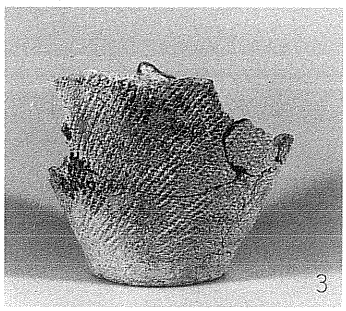


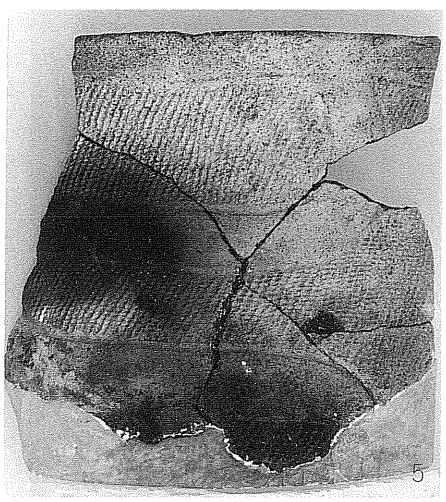
14号土坑（南→）

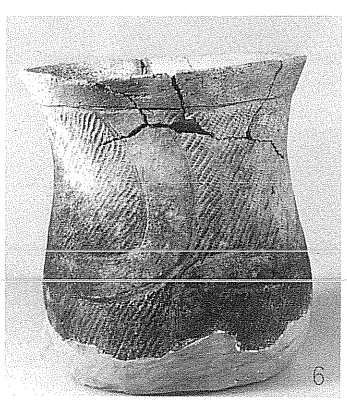


17号土坑（南→）



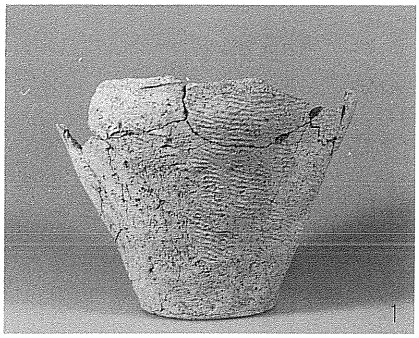


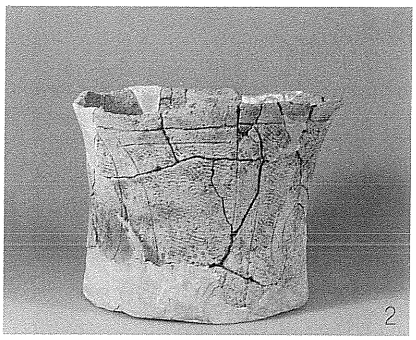


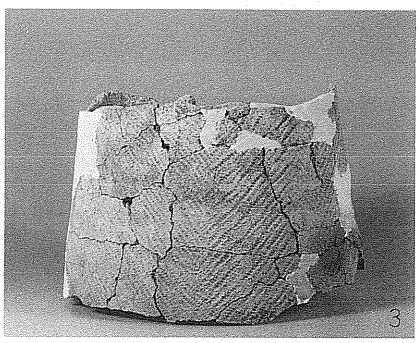


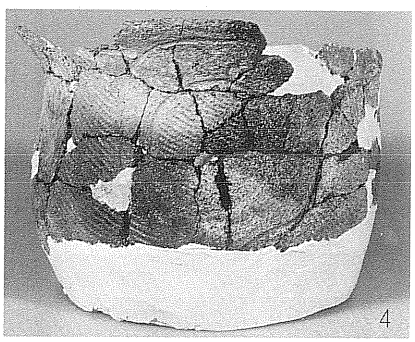
1　　2号住居跡
2～5　3号住居跡
6～8　4号住居跡

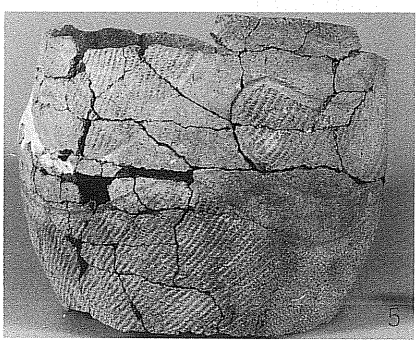
図版13

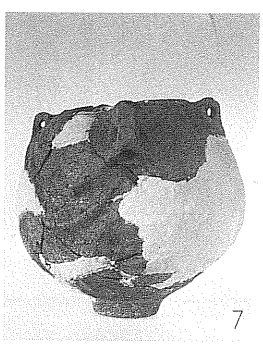


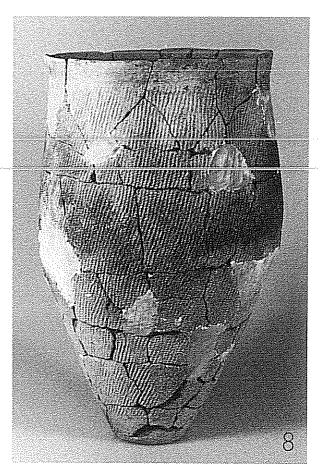


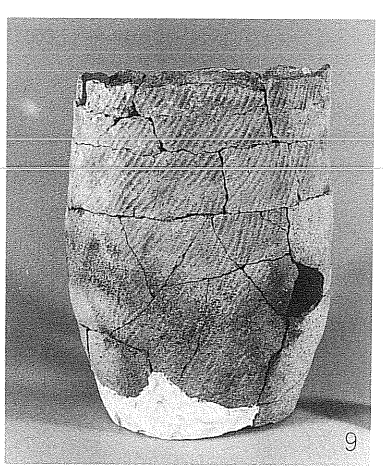




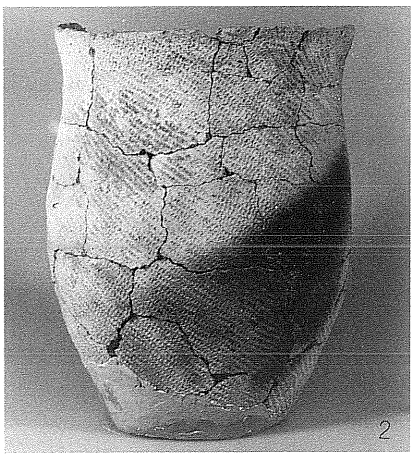


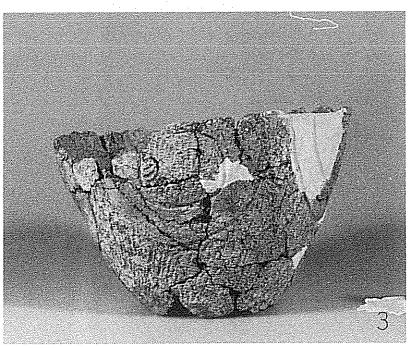


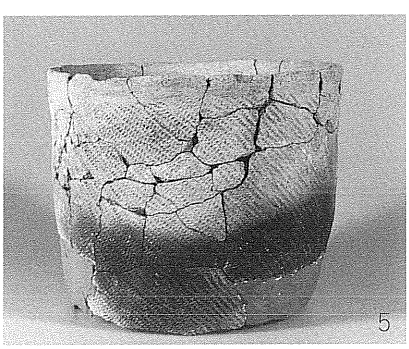


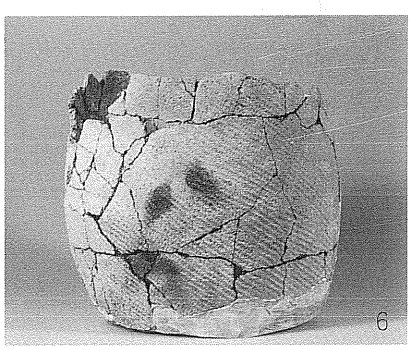


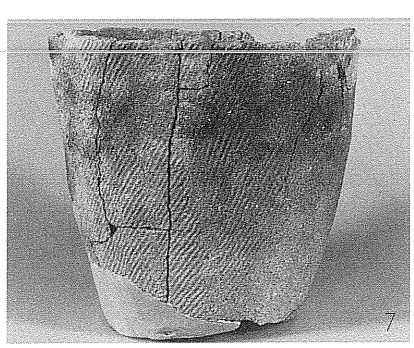
1～3　5号住居跡
4　7号住居跡
5～8　8号住居跡
9　9号住居跡

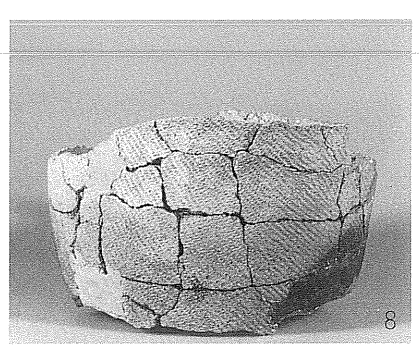






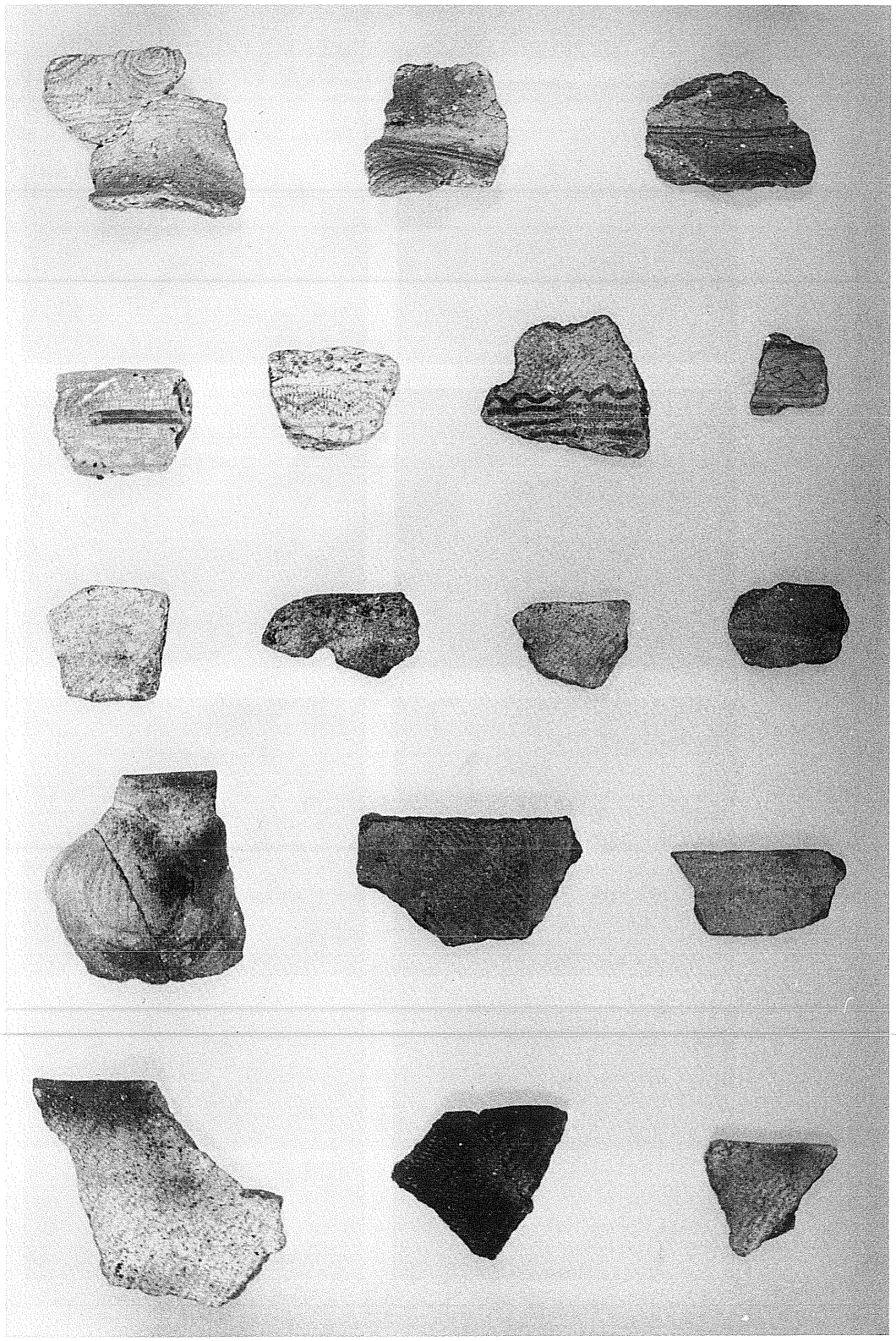




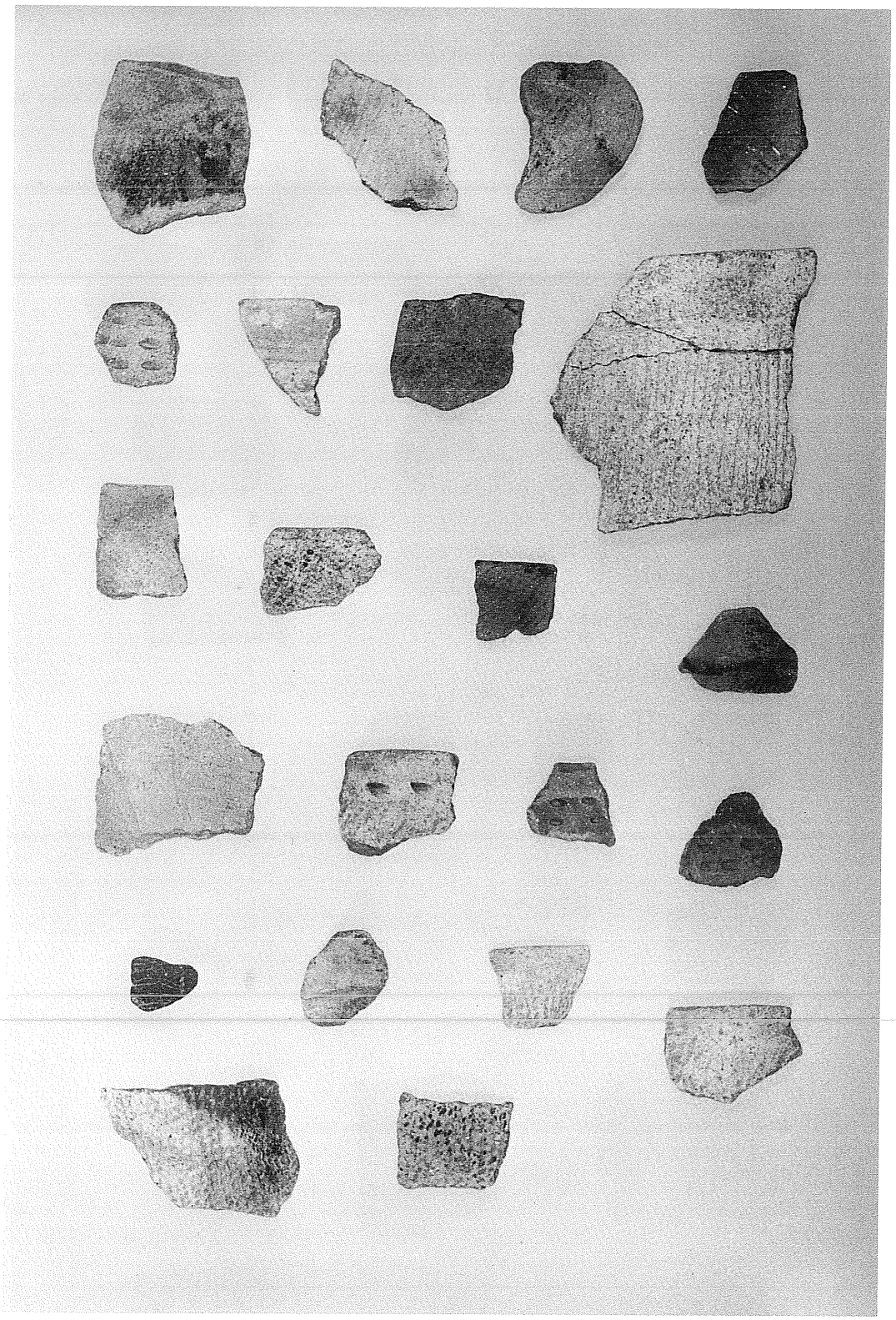


1　　10号住居跡
2　　11号住居跡
3・4　12号住居跡
5　　14号住居跡
6　　15号住居跡
7　　17号住居跡
8　　19号住居跡

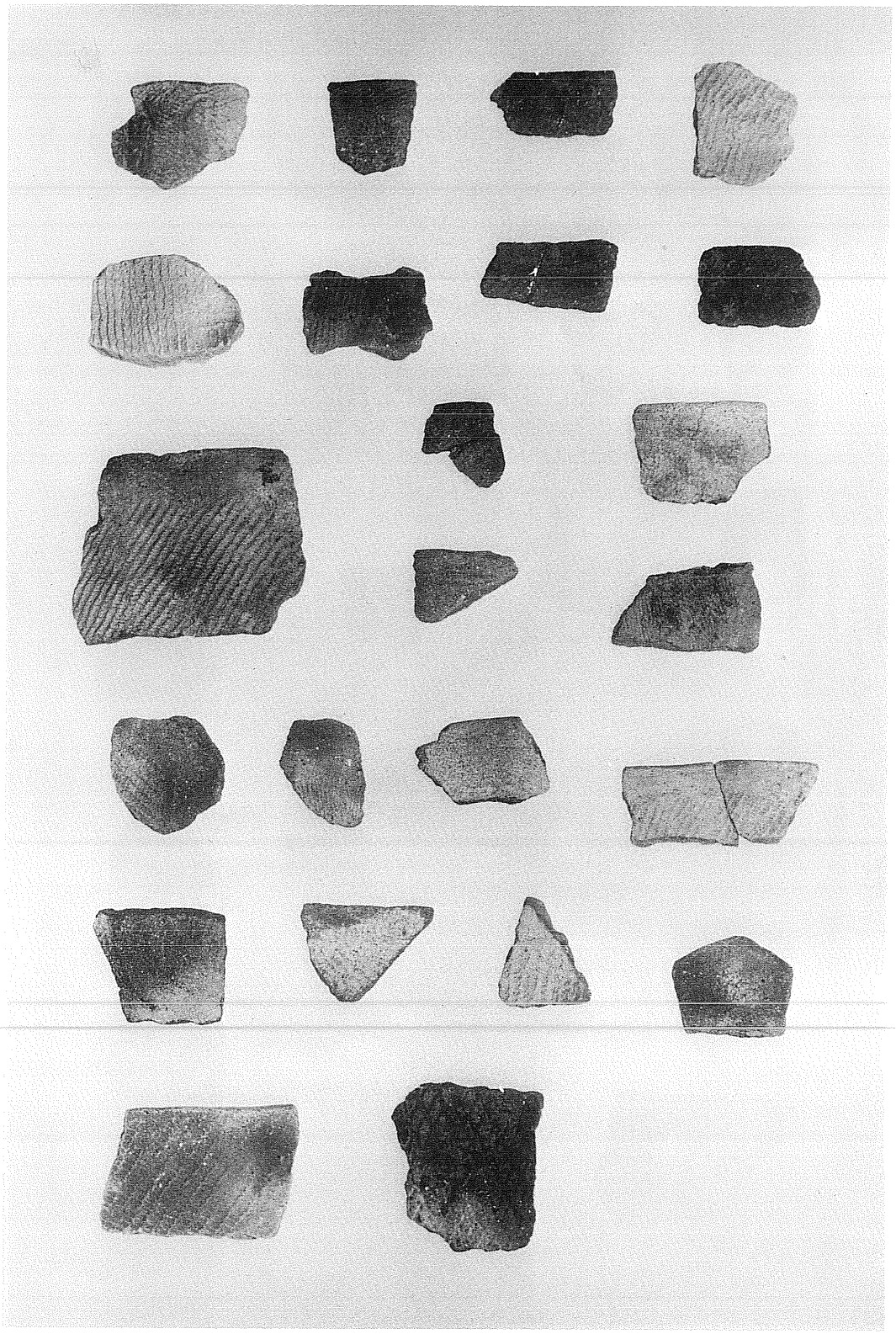
図版15



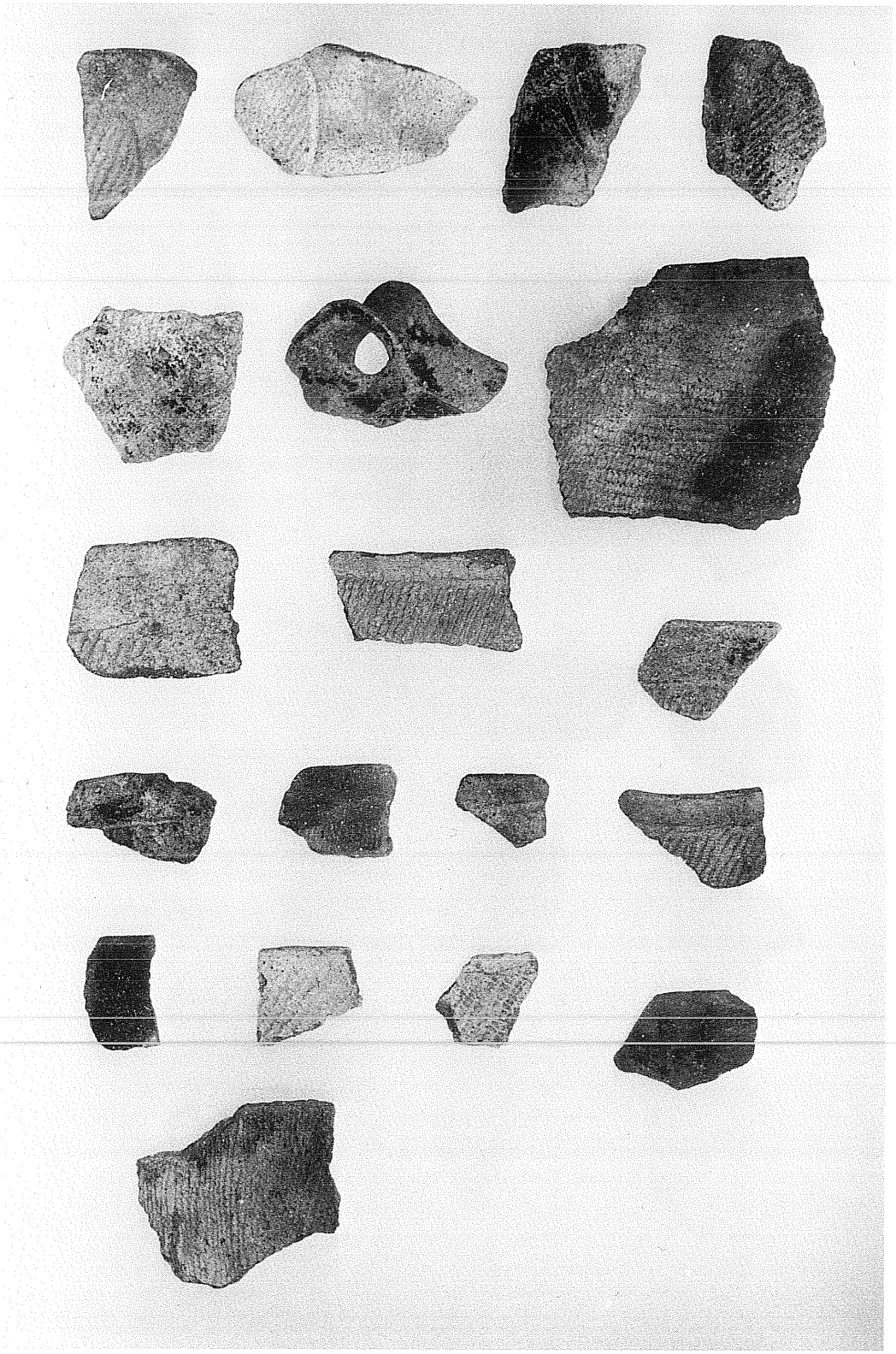
図版16　遺構内出土土器



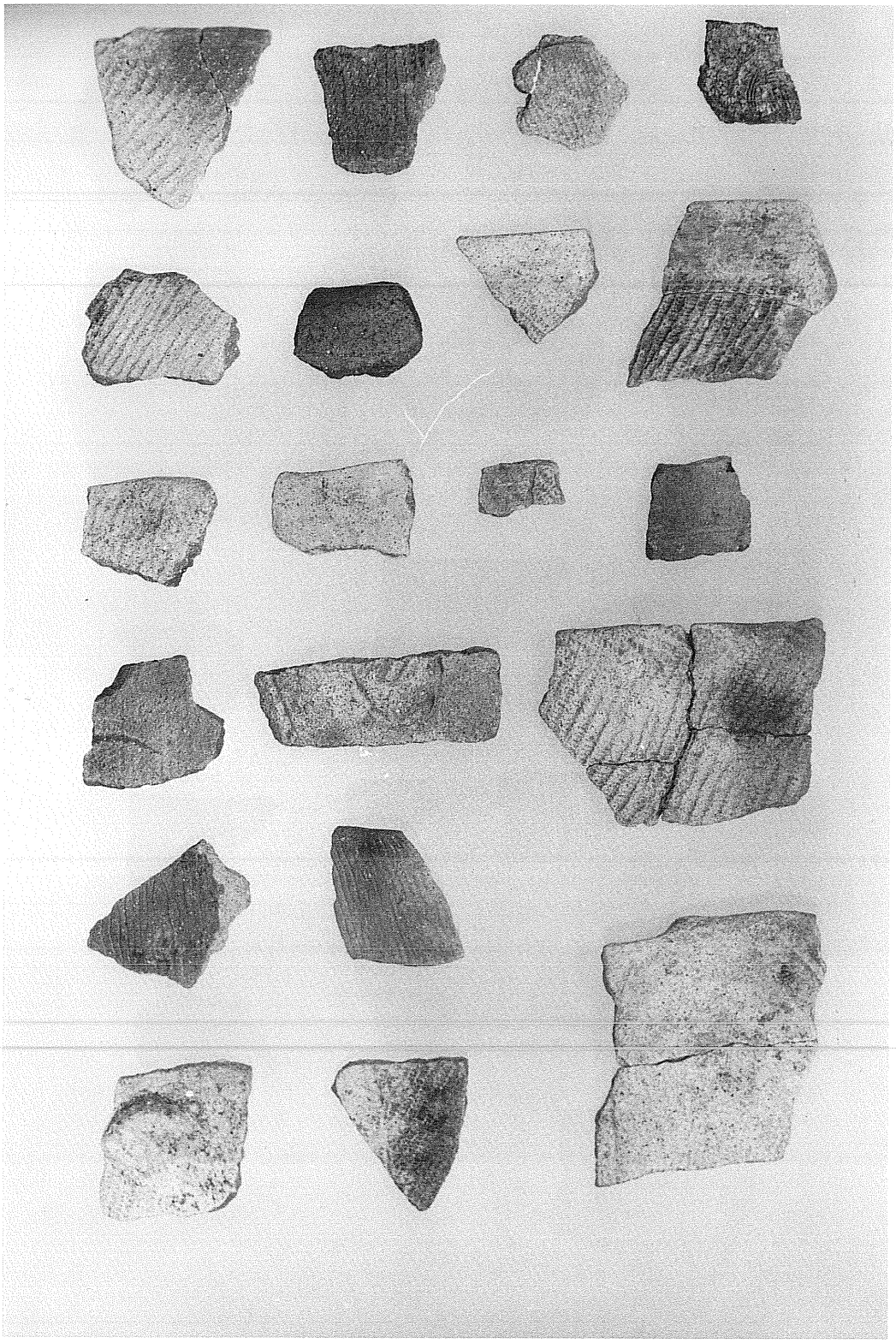
図版17　遺構内出土土器



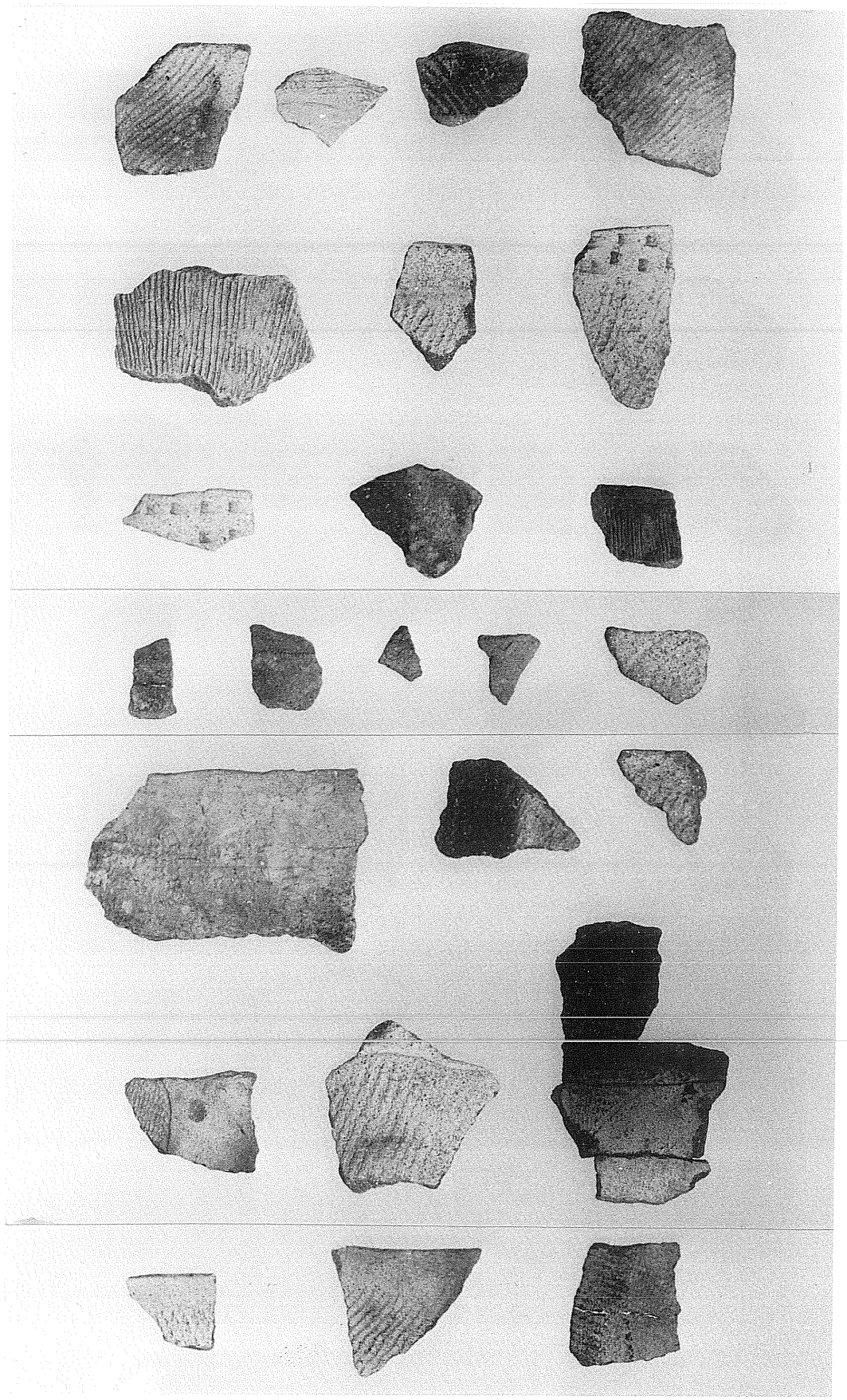
図版18　遺構内出土土器



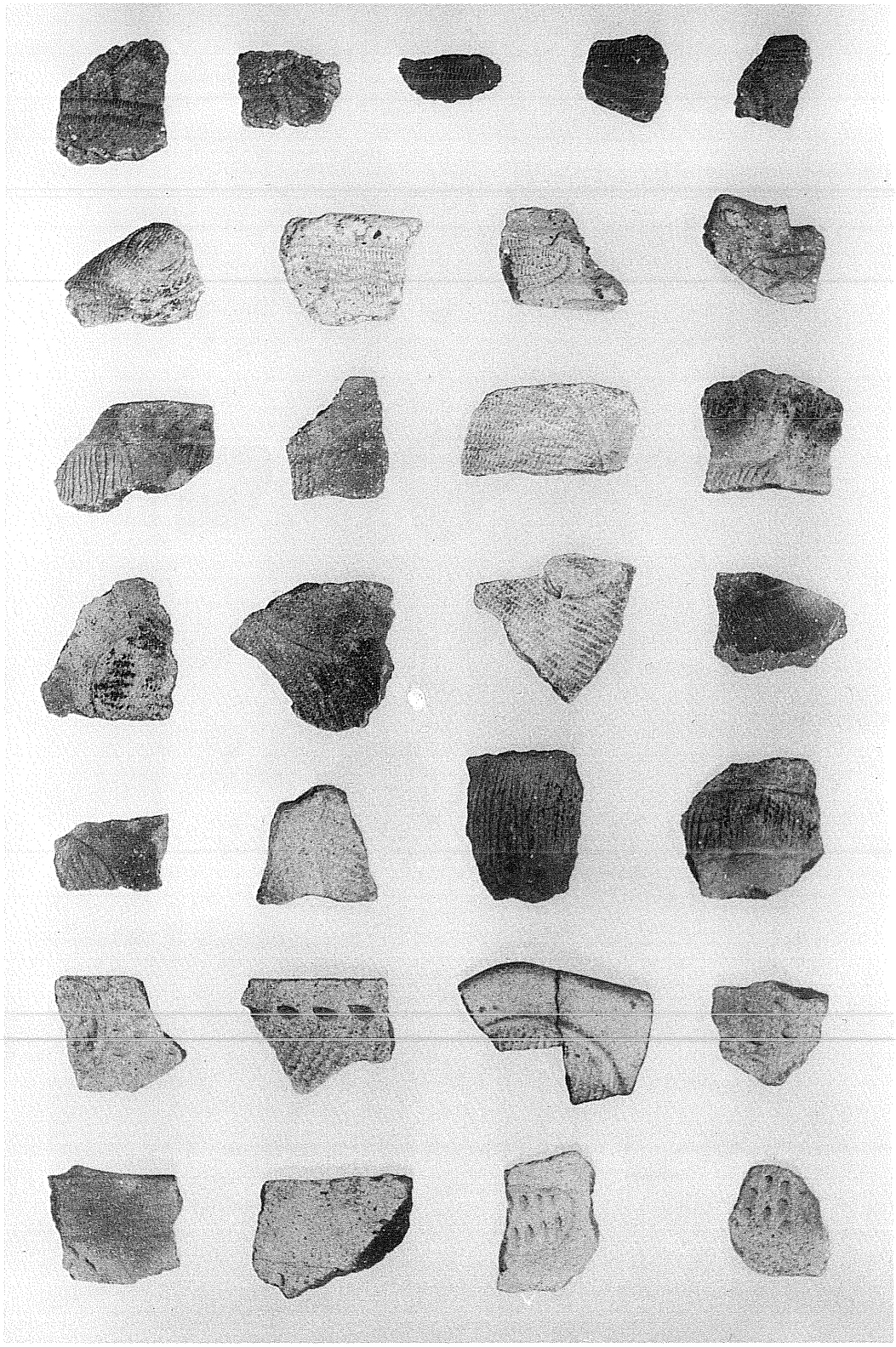
図版19　遺構内出土土器



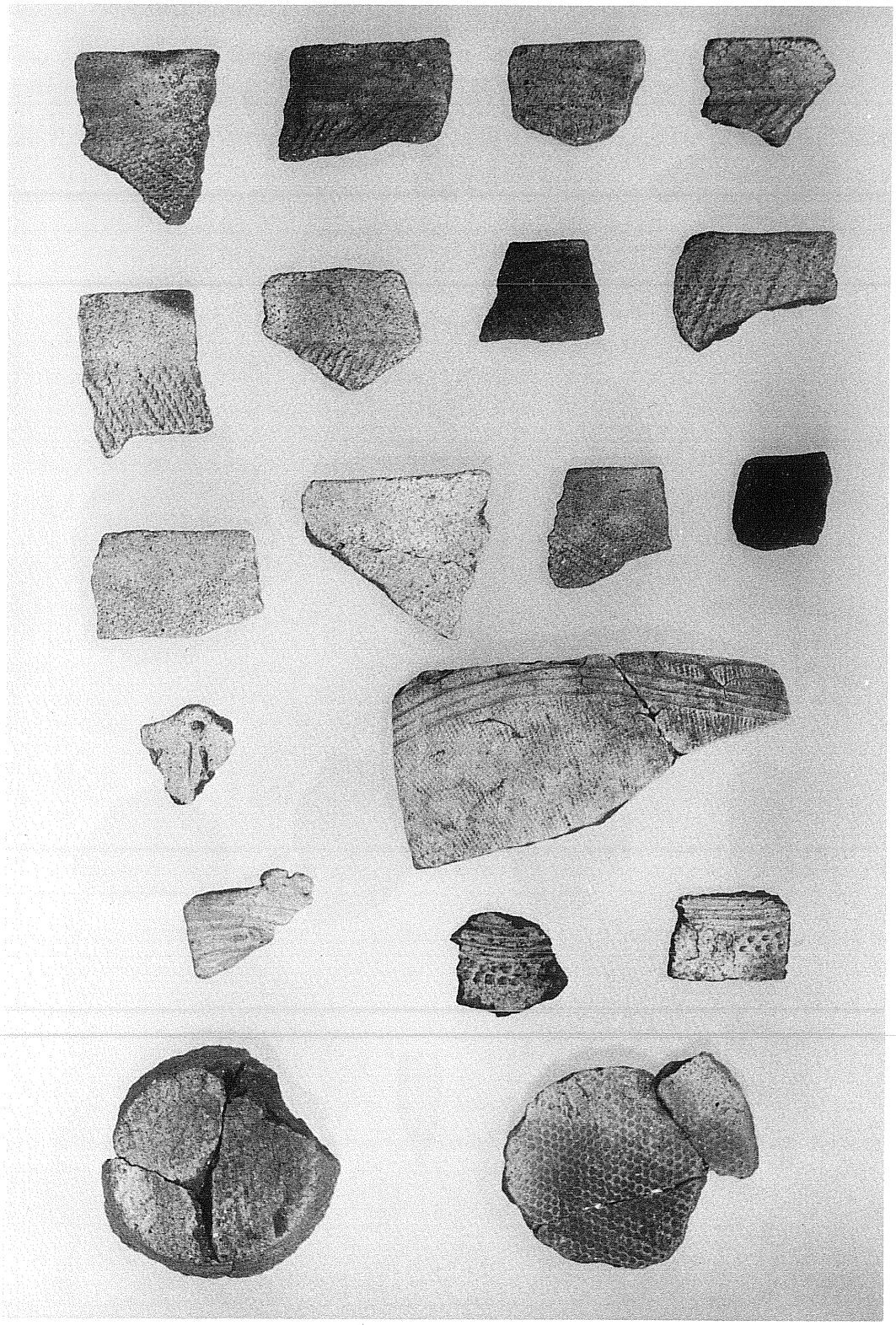
図版20　遺構内出土土器



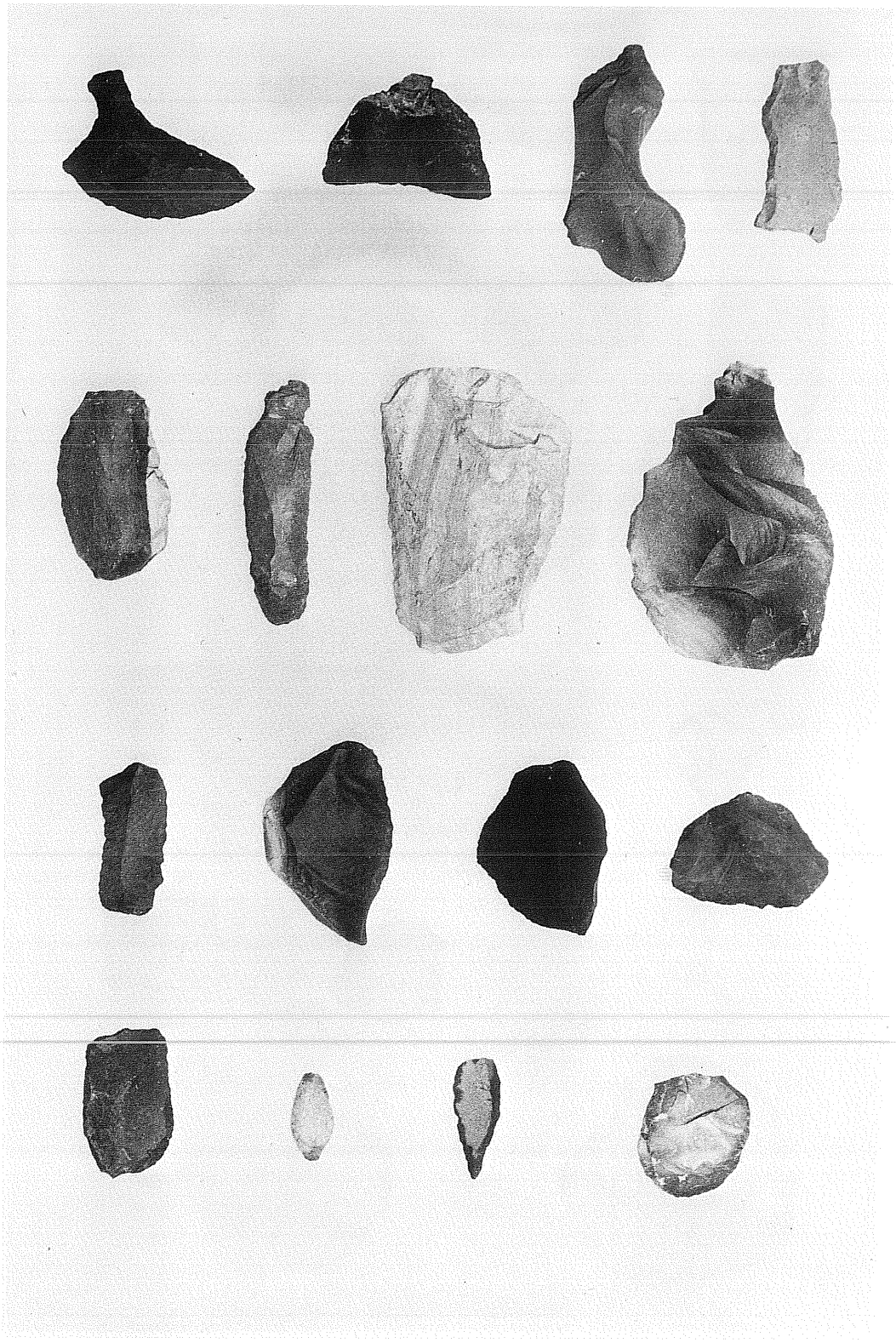
図版21　遺構内出土土器



図版22　遺構外出土土器

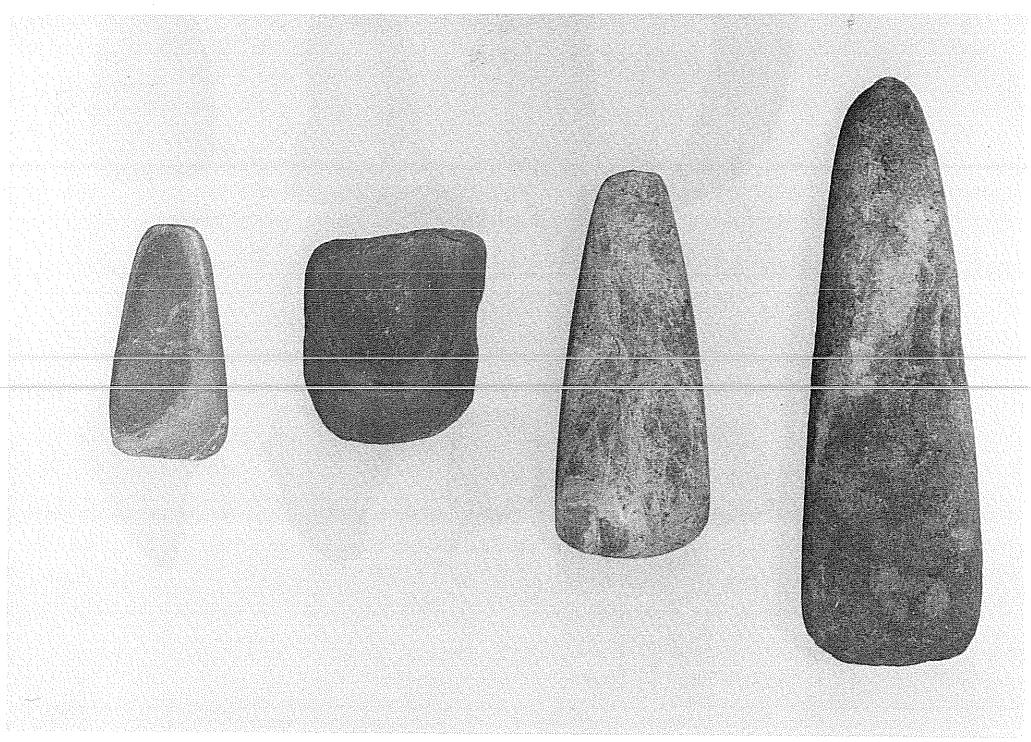


図版23　遺構外出土土器



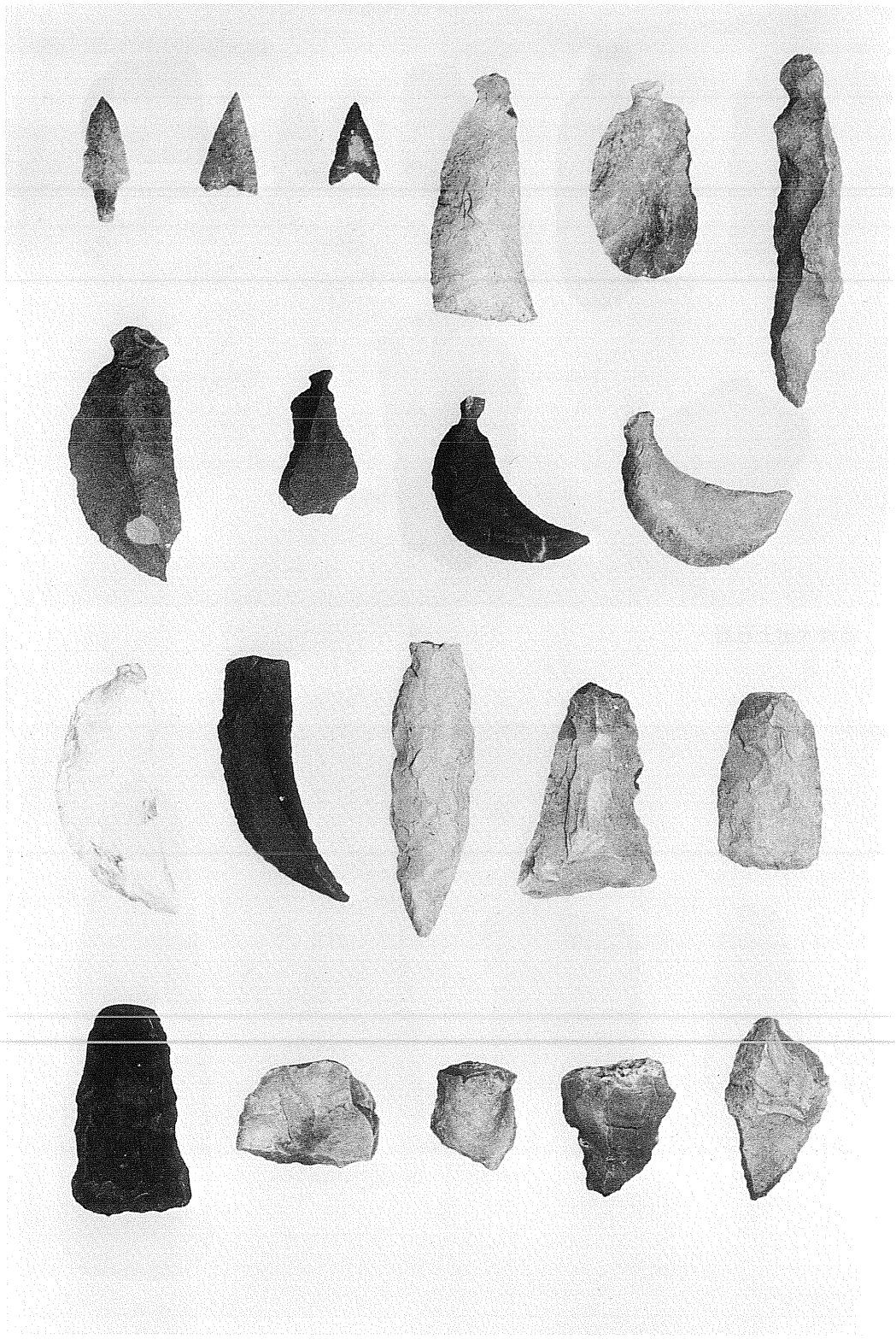
図版24　遺構内出土石器

遺構内出土石器



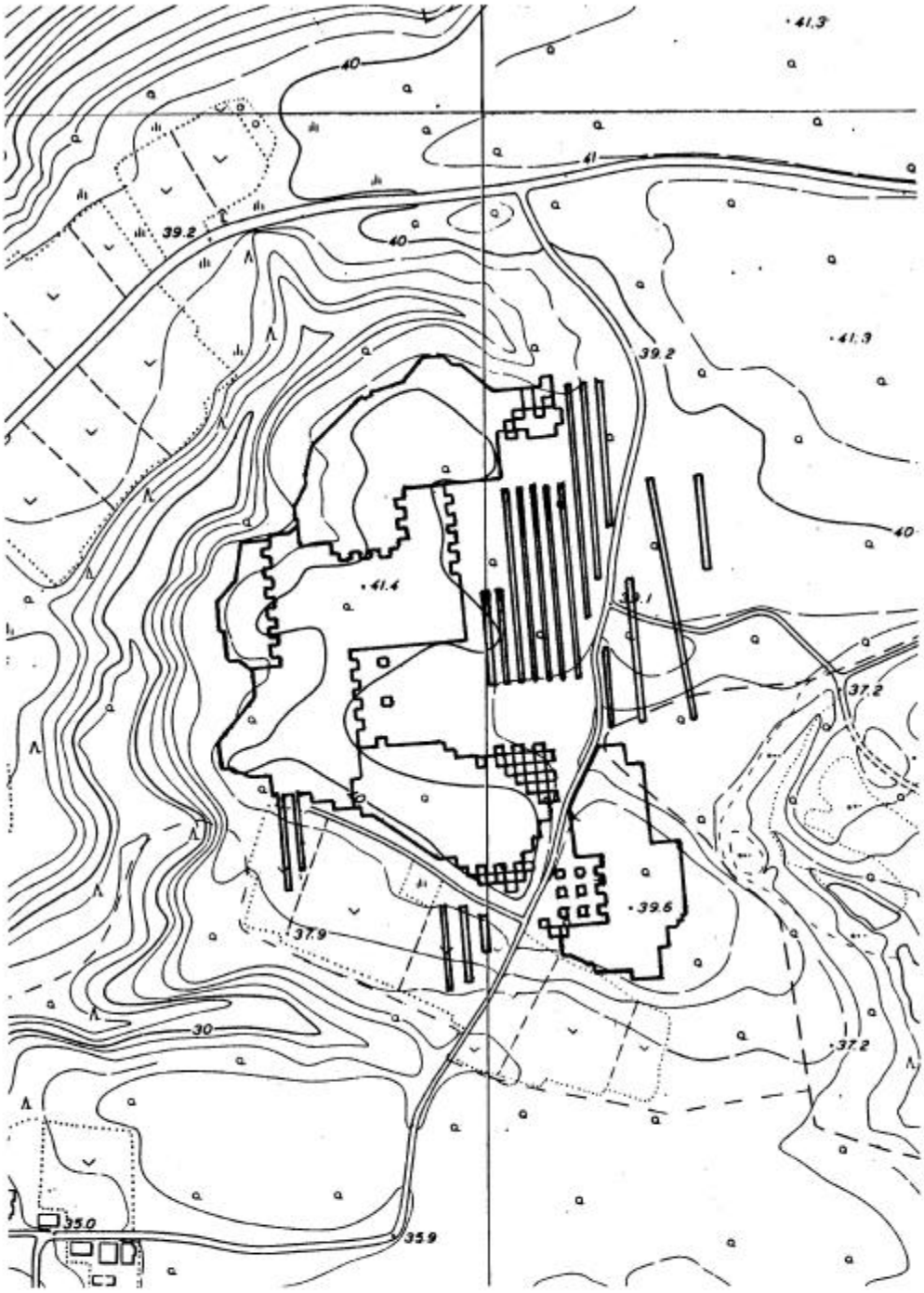
遺構外出土石器

図版25



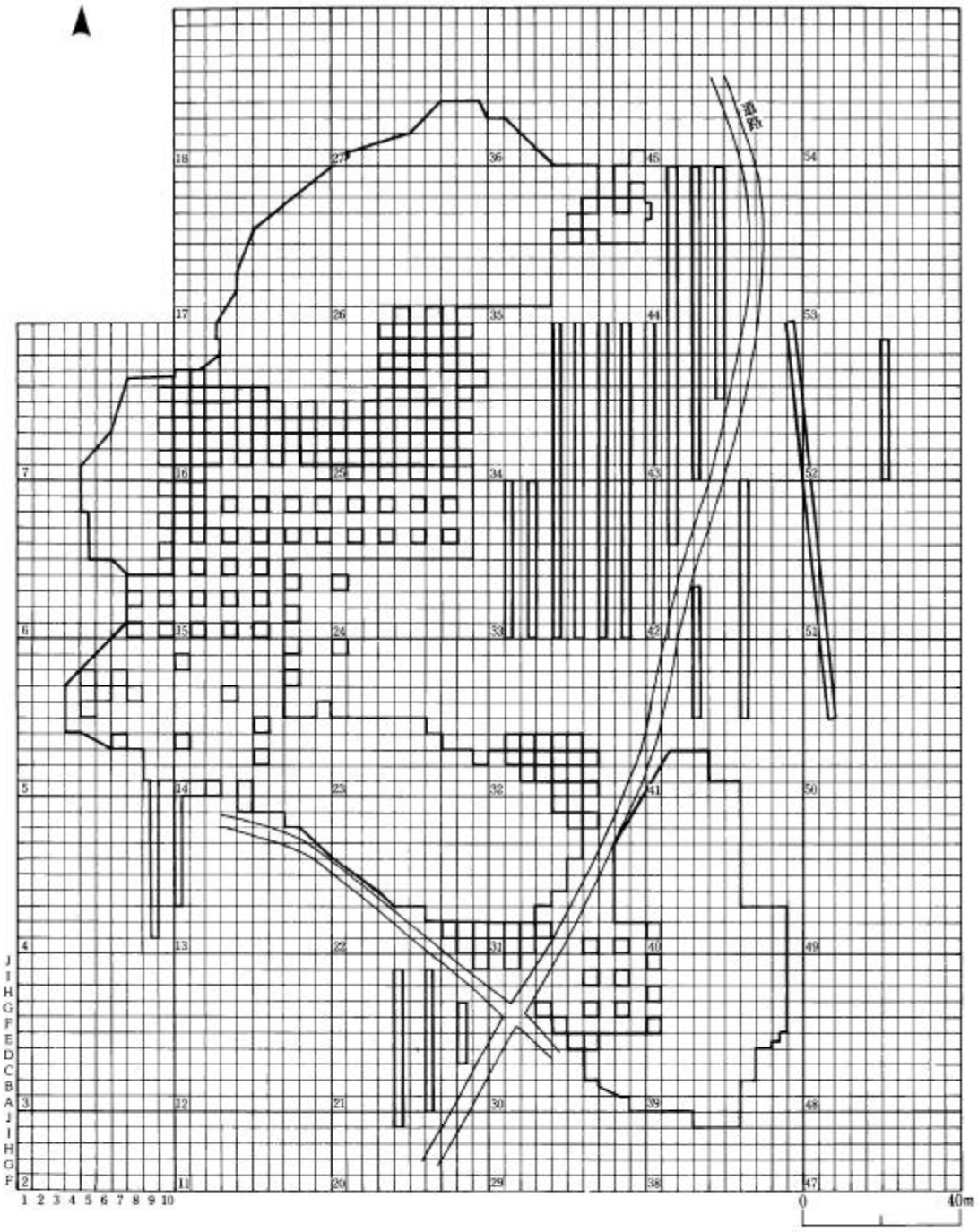
図版26　遺構外出土石器

坂ノ上Ｆ遺跡



0 100m

第１図　遺跡周辺の地形



第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

南西から入り込んだ沢が北、西、南側の３面にあり、西に張り出した標高約40m（上野台Ⅰ段丘面）の台地上に位置する。遺構は沢に面した台地縁辺部に検出された。

遺跡は縄文時代中期初頭、中期末、弥生時代、平安時代、その他（時期不明）で、竪穴住居跡16軒、竪穴状遺構１基、土坑146基、埋設土器遺構15基、炉４基、掘立柱建物跡14棟、柱列２列が検出された。

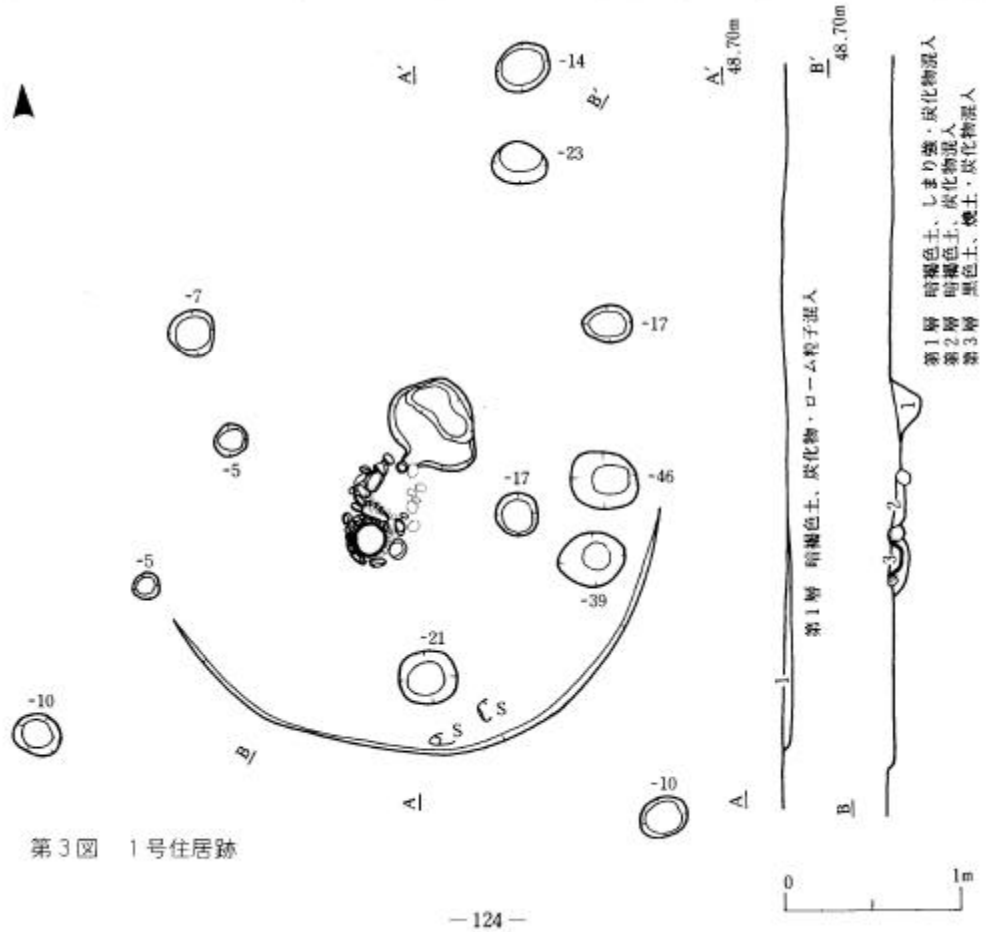
隣接する遺跡では北西約250mに縄文時代中期末～後期初頭の「坂ノ上Ａ遺跡」、北約50mに縄文時代中期末の「坂ノ上Ｅ遺跡」、南西約300mに縄文時代晩期、弥生時代の「狸崎Ａ遺跡」等の関連遺跡が所在する。

遺構と遺物

１号住居跡（第３図）

調査区北側で検出された。

プランは径2.9ｍの円形を呈すると考えられ、南壁のみの検出である。確認面からの深さは５cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは８個検出されたが、規則的でない。炉は石囲土器埋設部、



第３図　１号住居跡

石組部からなる。石囲土器埋設部は深鉢形土器の胴下部を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は側面に石を組んでおり、抜き取った痕跡が認められた。石は火熱を受けているが、底面は火熱を受けた痕跡が認められなかった。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第20図１～３）

１は炉埋設土器、他は覆土出土である。１は深針形土器の胴下部で、縦位に沈線が施されている。地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。２は波状口縁をもつ鉢形土器で、撚糸文を施す。３は深鉢形土器の胴下部で、ＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第61図44）

44はくぼみ石である。

２号住居跡（第４図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径４ｍの円形を呈し、周溝が認められ、75・76号土坑と重複する。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは13個検出され、主柱穴は４個と考えられる。炉は土器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込みは底・側面が火熱を受けている。一段深い掘り込みは壁に接する。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第20図４・５、第23図18・19）

４は炉埋設土器、５は床面、他は覆土出土である。４は深鉢形土器の下半分で、ＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。５は鉢形土器の胴下部で、縦位に沈線区画の磨消帯を施す。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第27図１）

１は無茎の石鏃である。

３号住居跡（第５図）

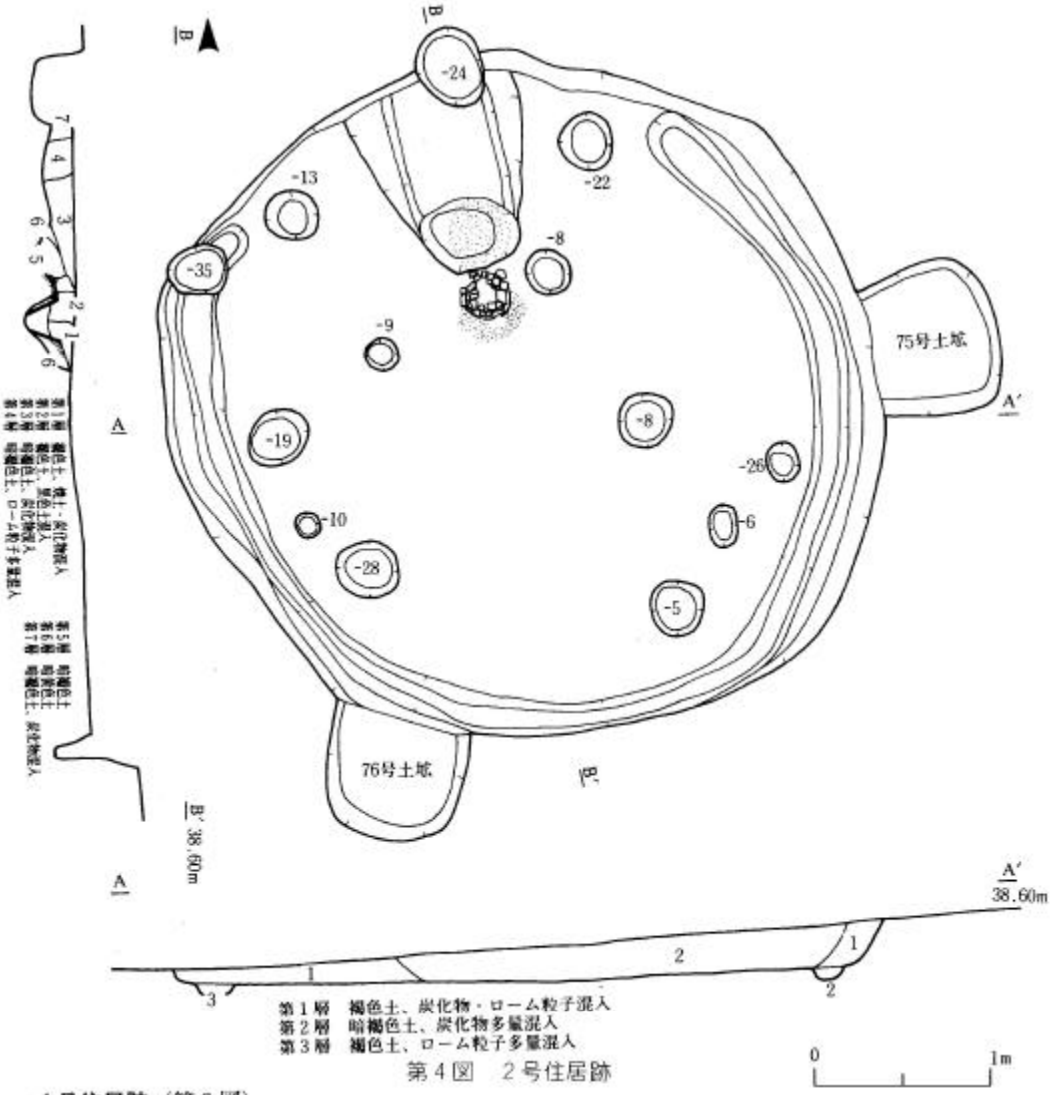
調査区北西部で検出された。

プランは長軸7.3ｍ、短軸３ｍの長方形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されたが、壁際の８個が主柱穴と考えられる。炉はない。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

石器（第27図２）

２は縦型の石匙である。



第４図　２号住居跡

４号住居跡（第６図）

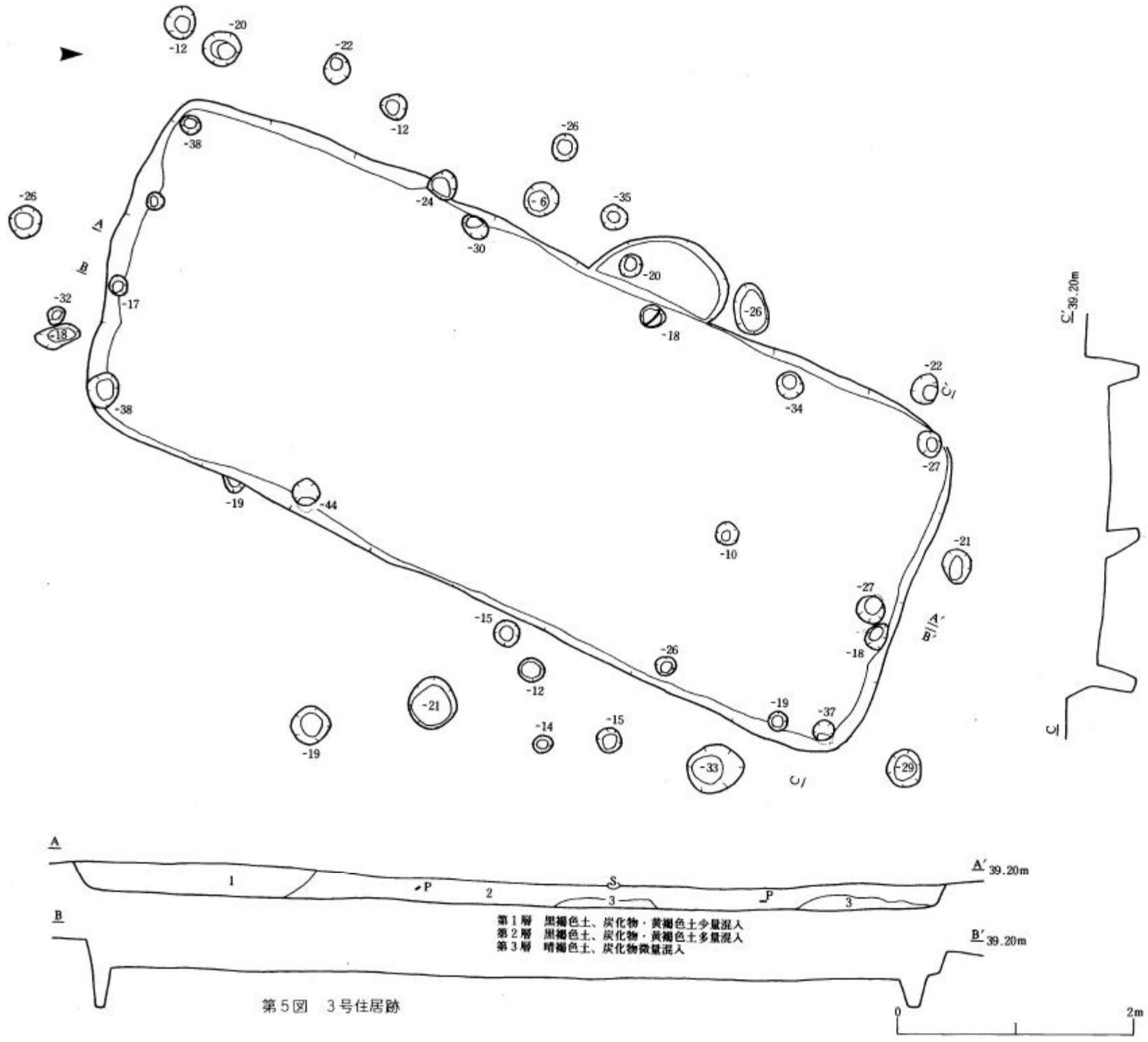
調査区北西部で検出された。

プランは長軸2.6m、短軸1.8mの長方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁の南寄りにカマドが付設されているが、袖は崩壊、煙道部が残る。ピットは多数検出されたが、壁コーナー部の４個が主柱穴と考えられる。床は平坦で堅いが、浅い掘り込みが２ケ所認められる。

出土遺物

土器（第20図６～９）

全て覆土出土の赤褐色土器である。６は皿で、底部切り離しは回転糸切り、無調整である。７・８は坏で、底部切り離しは回転糸切り、無調整である。７の内面には煤状炭化物の付着が認められ

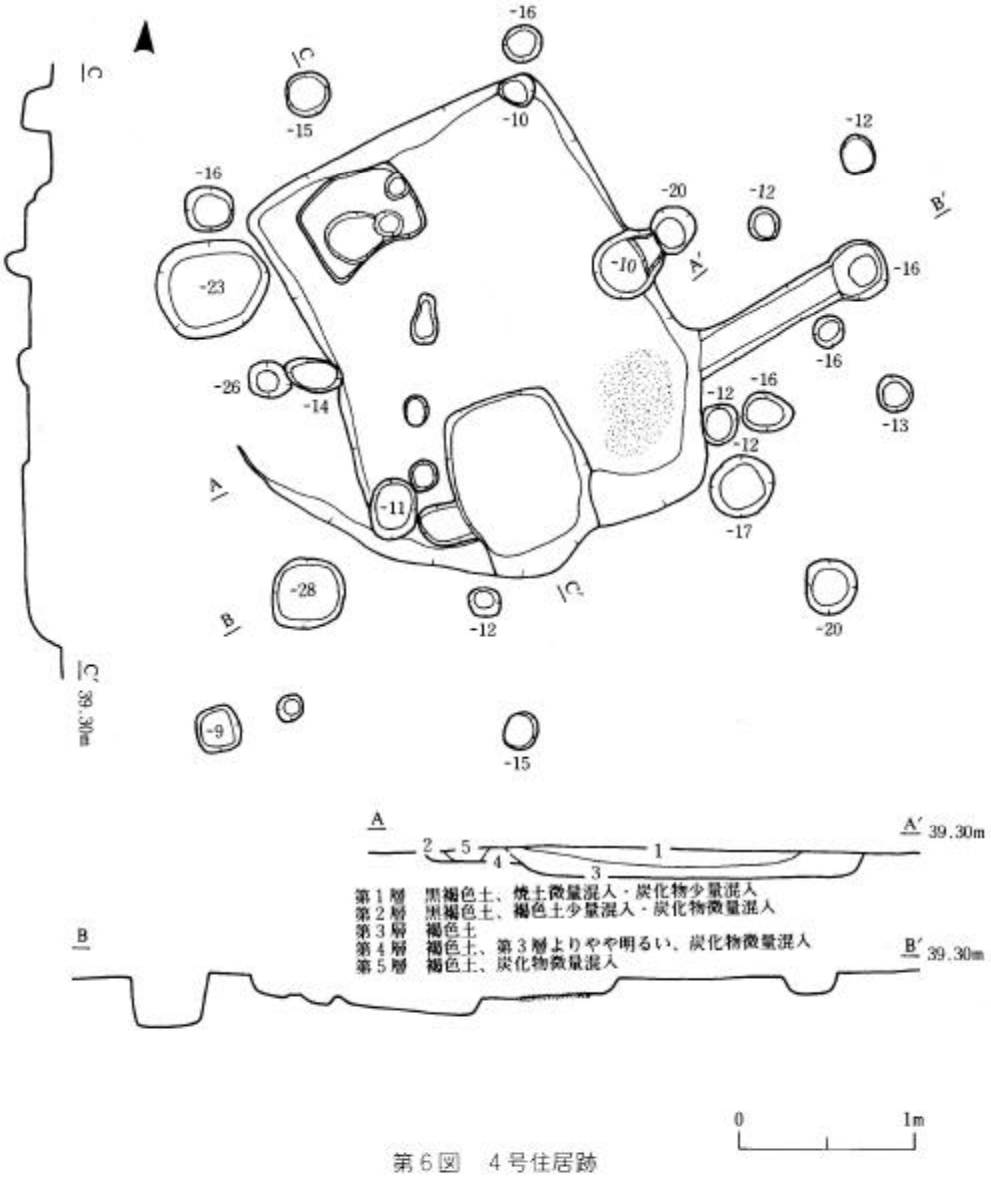

A
A′ 39.20m
B
B′ 39.20m
C
C′ 39.20m
1
2
3
P
S
第1層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土少量混入
第2層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土多量混入
第3層　暗褐色土、炭化物微量混入
0
2m

第5図　3号住居跡

る。9は口縁部が外反してから、ふたたび垂直に立ち上がる甕である。

石器（第27図3）

3は削器である。



第6図　4号住居跡

5号住居跡（第7図）

調査区北西部で検出された。

プランは一辺3.9mの正方形を呈すると考えられ、南と北側の壁が確認されただけである。確認

面からの深さは5cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁の南寄りにカマドが付設され、2基確認された。南側のカマドは、燃焼部が地山を10cm掘り込み、少量の焼土が堆積していた。煙道は一担くぼんだ後に再び立ち上がり煙出部となる。覆土に多量の焼土・粘土粒が入っていた。北側のカマドは、燃焼部が地山を12cm掘り込み、少量の焼土と炭化物が堆積していた。煙道は短かく、覆土に炭化物が入っていた。いずれも袖部は崩壊していた。両カマドの煙出し間に不整形の掘り込みがあり、上面よりフイゴの羽口が出土した。ピットは多数検出されたが、壁コーナー部の4個が主柱穴と考えられる。床は凹凸で、中央部に焼土の堆積がみられた。58・59・60号土坑と重複し、いずれも本住居とほぼ同時期である。

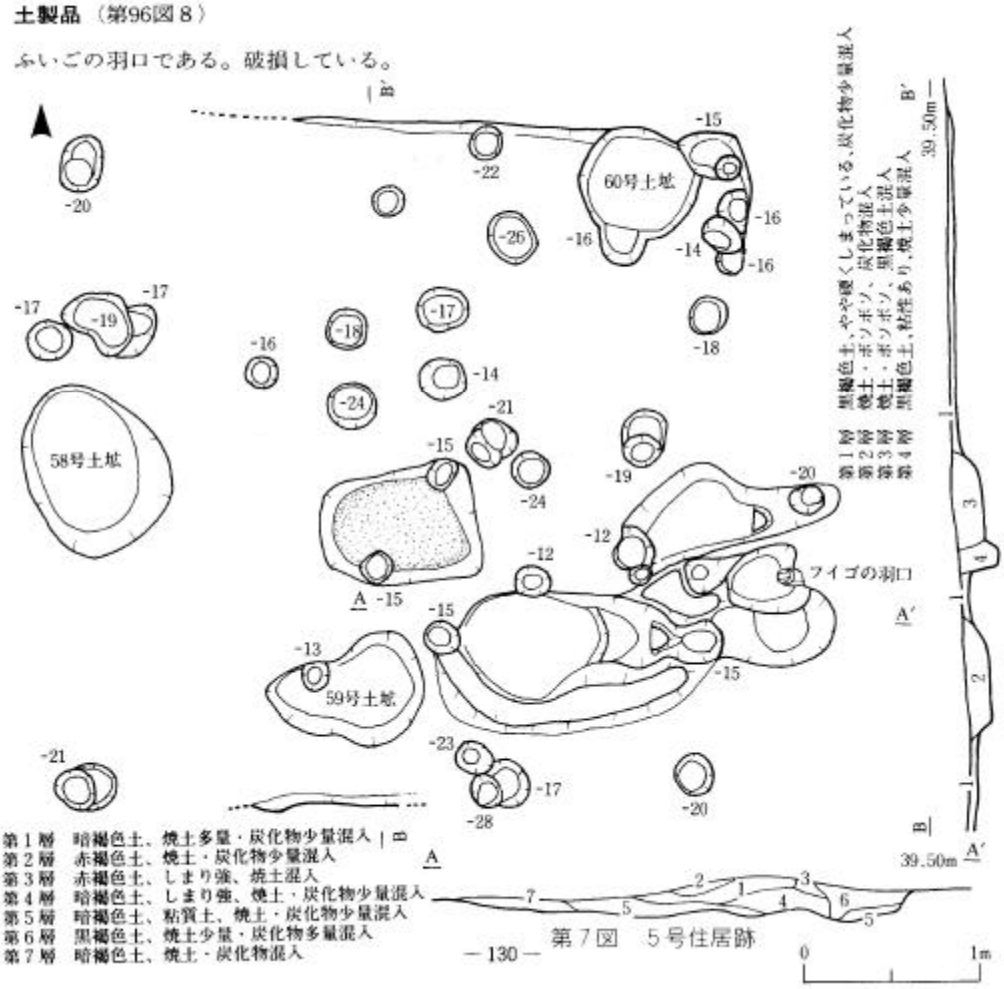
出土遺物

土器（第20図10・11）

いずれも床面出土の赤褐色土器である。10は坏で、底部切り離しは回転糸切り、無調整である。11は口縁部が、外反してからふたたび垂直に立ち上がる甕で、ロクロ成形後にヘラケズリ整形を行っている。

土製品（第96図8）

ふいごの羽口である。破損している。



第7図　5号住居跡

6号住居跡（第8図）

調査区南側で検出された。

プランは長軸6ｍ、短軸5ｍの不整形を呈する。確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは8個検出されたが、深い掘り方の4個が主柱穴と考えられる。炉は地床炉で若干くぼみ、強く火熱を受けて赤変している。住居の長軸線上北側に長軸90cm、短軸10cm、深さ60cmのピットが認められる。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第21図12、第23図20～34）

23・24・25・32・34はピット、29は床面、他は覆土出土である。半截竹管状工具内面による半隆起線で文様を構成するもの、撚糸圧痕を行なうものである。12は口縁部が外反する深鉢形土器で、口径37cm、器高50.5cmである。口唇部に2個の小突起が付き、内面は玉抱三叉文がみられる。口縁部は蓮華状文、縦位刻線を入れて、その中を横位沈線が走る、横位無文帯、半隆起線を施す。頸部は蓮華状文、半隆起線文を施し、2個1対の突起をもつ。頸部の蓮華状文は2ヶ所「∪」状に、また突起下は「∩」字状の貼り付けを施す。胴部は格子目文を施した後に、半隆起線文を直線、曲線的に施文する。

7号住居跡（第9図）

調査区西側、台地の縁辺部で検出された。

プランは長軸12.4m、短軸11mのほぼ円形を呈する。壁は見られず、周溝が確認された。周溝は幅20～30cm、深さ15～25cmで一部途切れている箇所もあるが、ほぼ全周する。周溝は36号土坑、88号土坑と重複しているが、切り合い関係は不明であった。多数検出されたピットの中でＰ１～Ｐ４の4個が主柱穴と考えられる。炉は中央部に作られ、焼土範囲は140×120cmで、約10cmほど掘り込まれ、焼土が堆積している。炉の北寄りに礫が2個付設され、火熱を受けている。床は全体に平坦で、堅い。住居内西側の89号土坑は住居に付随するものか、新旧関係は不明である。西側に3ヶ所の焼土が確認された。

出土遺物

土器（第23図35～42）

全て覆土出土である。工字文、変形工字文、平行沈線文、刷毛目文を施すものである。

石器（第27図4）

4は有茎の石鏃で、茎部にアスファルトの付着が認められる。

8号住居跡（第10図）

調査区南側で検出された。

プランは長軸19m、短軸6.1ｍの中程が若干すぼむ隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは南側約30cm、北側約10cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは25個検出されたが、深い掘り方の対峙

する12個の主柱穴と考えられるもので、柱痕跡を留める柱穴を確認された。炉は地床炉で長軸線上にほぼ等間隔で３ケ所検出された。床は平坦で、堅い。住居跡中央部より南側床面直上で炭化材、焼土が見られたが投棄されたもののようである。北東隅に台石が出土している。

出土遺物

土器（第24図43～54）

全て覆土出土である。口縁部に粘土紐を貼り付け、撚糸圧痕、刺突を施す比較的厚手の深鉢形土器や、縄文地文を施文した後に撚糸圧痕文を施すもの、沈線区画の磨消帯を有するものである。

石器（第27図５～11、第61図45・46）

５・６は無茎の石鏃、７・８は縦型の石匙、９・10はヘラ状石器で、10は石斧としての機能も考えられる。11は磨製石斧、45・46は磨石であるが、45はくぼみ石としても使用されている。

９号住居跡（第11図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径約3.3ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは６個検出され、主柱穴は４個と考えられる。炉は土器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第22図13、第25図55～59）

13は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、隆帯貼り付け、隆帯に刻みを施すものである。13は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第96図９・10）

いずれも再利用土製品（円盤状土製品）である。

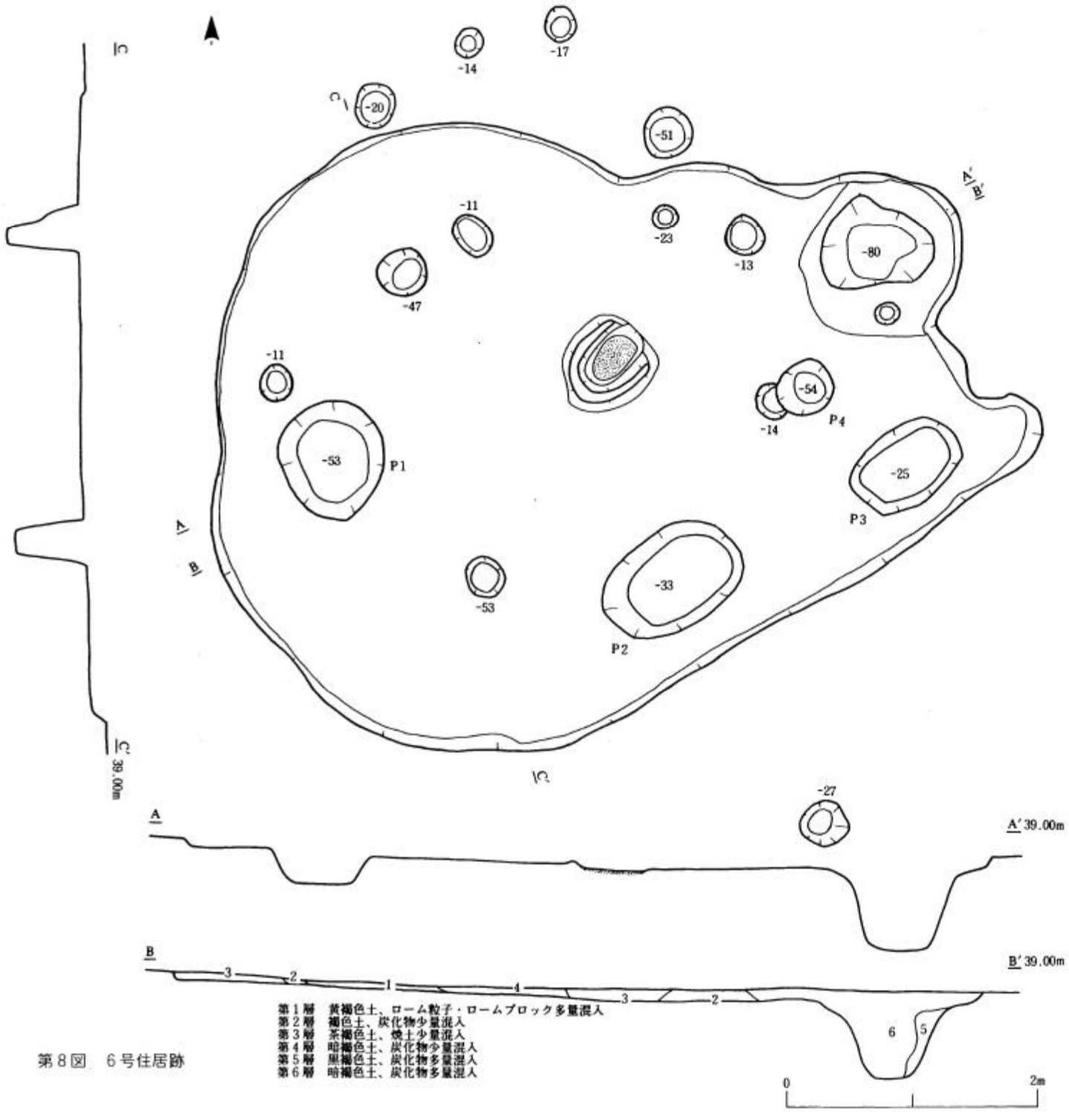
石器（第27図12）

12は横型の石匙である。

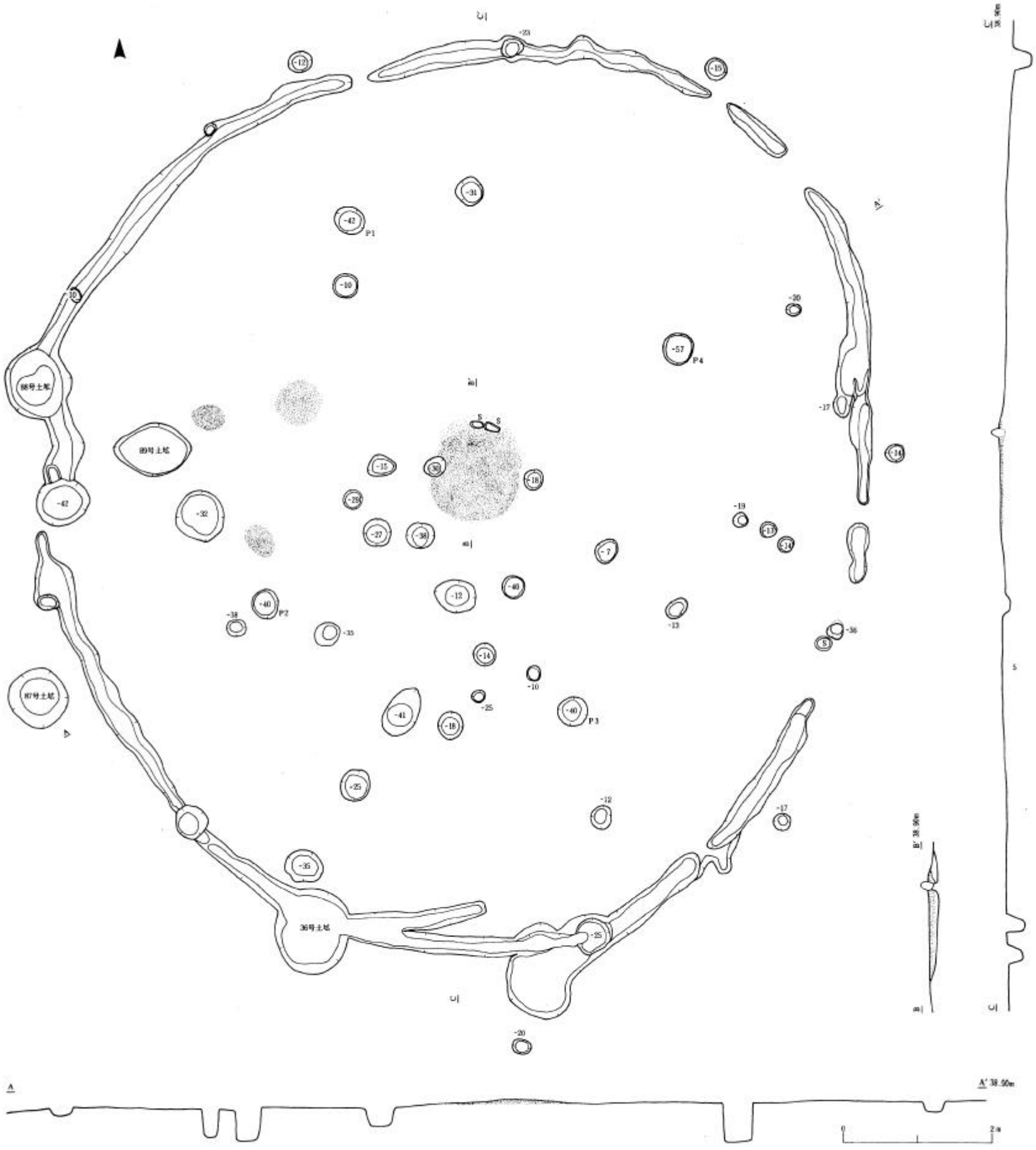
10号住居跡（第12図）

調査区南東部で検出された。

プランは長軸５ｍ、短軸４ｍの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは15個検出されたが、壁コーナー部の４個が主柱穴と考えられる。炉は地床炉で若干くぼんでいる。住居長軸線上北側西寄りに径１ｍ、深さ35cmのピットが認められる。床は平坦で堅く、14号建物跡と重複する。

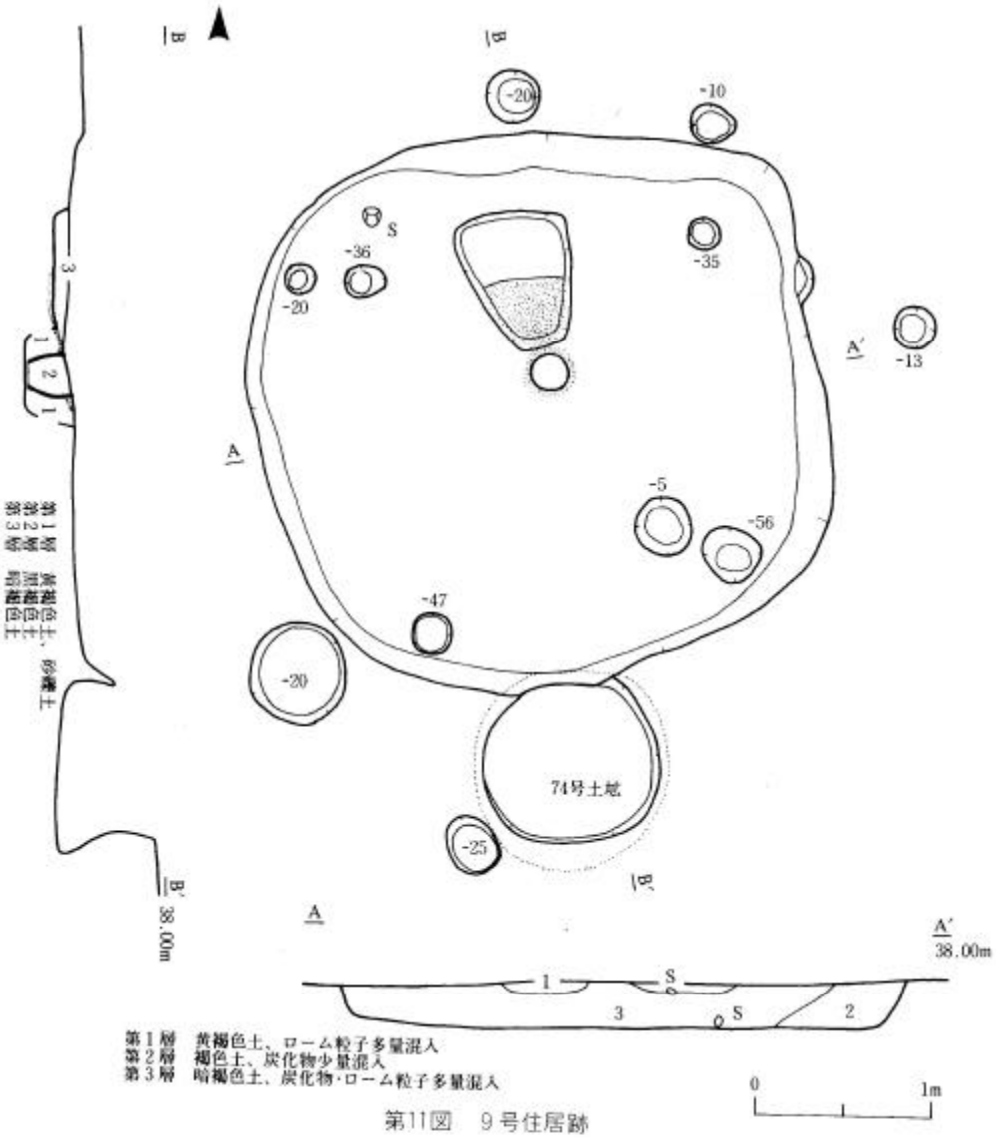

-14
-17
-20
-51
-11
-23
-13
-80
-47
-11
-54
-14
P4
-53
P1
-25
P3
-33
-53
P2
-27
A
A'
B
B'
C
C'
39.00m
39.00m
3
2
1
4
3
2
6
5
第1層　黄褐色土、ローム粒子・ロームブロック多量混入
第2層　褐色土、炭化物少量混入
第3層　茶褐色土、焼土少量混入
第4層　暗褐色土、炭化物少量混入
第5層　黒褐色土、炭化物多量混入
第6層　暗褐色土、炭化物多量混入
0
2m

第8図　6号住居跡



第9号　7号住居跡

縮1/20　8号住居跡



第11図　9号住居跡

出土遺物

土器（第22図14、第25図60～62）

14・60は床面、他は覆土出土である。14は浅鉢形土器である。4個の突起をもち、3個は2～3個の粘土貼り付け、1個は2個の突起を鋸歯状に貼り付けた粘土紐で連絡する。その下には「の」の字状に粘土紐を貼り付ける。各突起間にも「の」の字状の粘土貼り付けを行う。頸部には粘土紐を巡らし、等間隔に棒状工具の側面を押し当てて刻み目状の文様を施している。60は深鉢形土器の口縁部で、粘土紐貼り付け、撚糸圧痕の施されるものである。61・62は同一個体で、地文を施文した後に沈線区画の磨消帯を施す。

石器（第27図13～18）

13は有茎の石鏃、14は石錐、15は横型の石匙で、つまみ部にアスファルトの付着が認められる。16～18は磨製石斧で、アスファルト状の付着物が認められる。

11号住居跡（第13図）

調査区南東部で検出された。

プランは径6.4ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されたが、深い掘り方の６個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を斜位に埋設し、周辺は火熱により赤変している。石組部は側面に石を組むもので、抜き取った部分もある。底面が火熱を受けている。掘り込み部は壁に接し、壁際が深く掘り込まれている。床は若干凹凸がみられ、北東壁付近は一段高くなっている。14号建物跡と重複する。

出土遺物

土器（第22図15、第25図63～68）

15は炉埋設土器、他は覆土出土である。粘土紐貼り付け及び撚糸圧痕文を施すもの、細い半截竹管状工具内面による半隆起線文を施すもの、粘土紐をうずまき状に貼り付けるもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。15は深鉢形土器で、ＬＲ単節斜縄文（縦位回転）を施す。

石器（第27・28図19～22、第61図47）

19・20は無茎の石鏃、21は横型の石匙、22は磨製石斧である。

12号住居跡（第14図）

調査区南東部で検出された。

プランは長軸4.2ｍ、短軸3.8ｍの楕円形を呈し、周溝が認められる。確認面からの深さは15cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されたが、深い掘り方の６個が主柱穴と考えられる。炉は石組部、掘り込み部からなる。石組部は側面に石を組み、底面と石が火熱を受けている。掘り込み部は皿状を呈して壁に接する。床は平坦で堅く、13号建物跡と重複する。

出土遺物

土器（第26図69～71）

全て覆土出土である。細い半截竹管状工具内面による半隆起線を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。

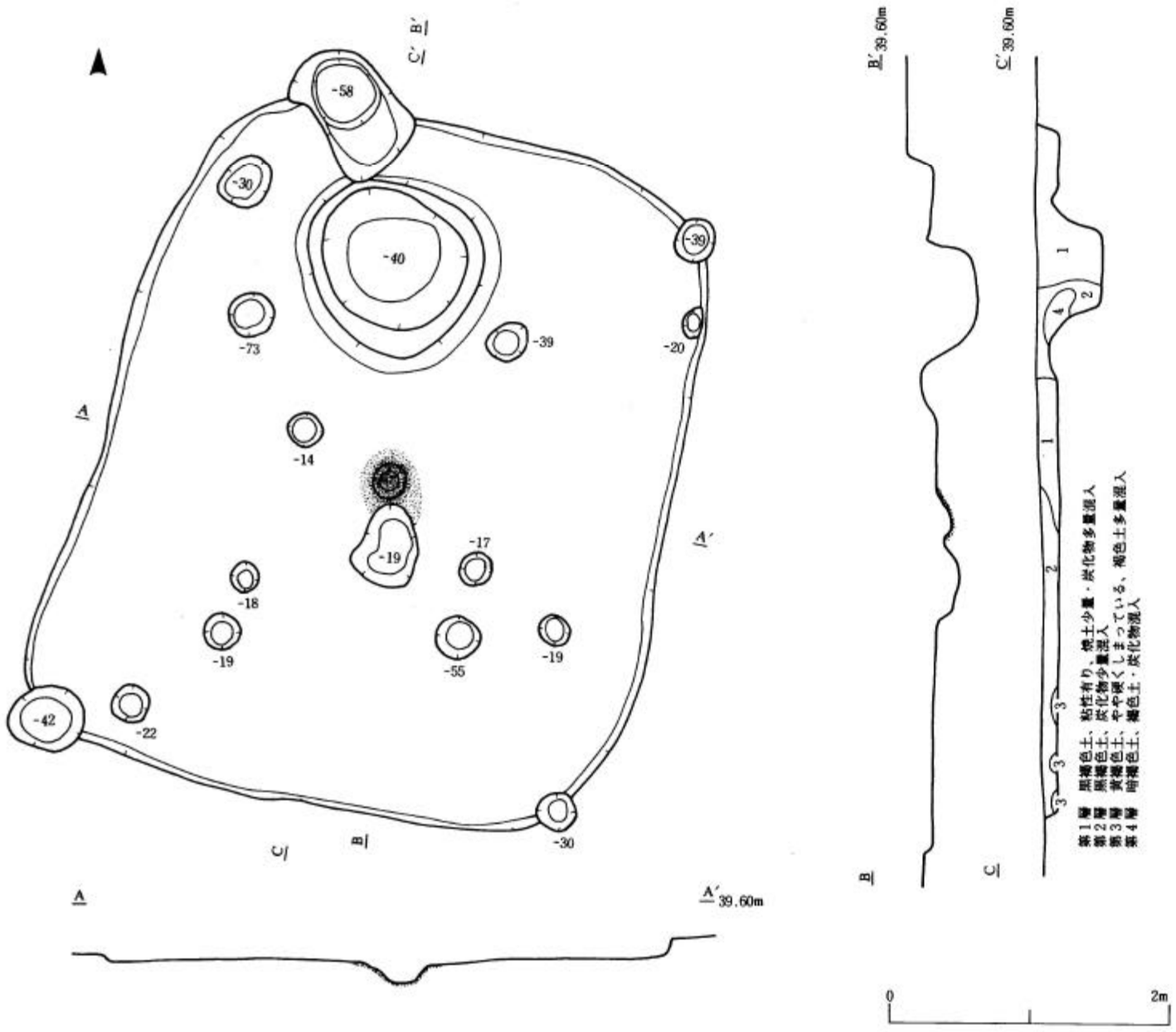
石器（第28図23）

23は槍先状石器である。

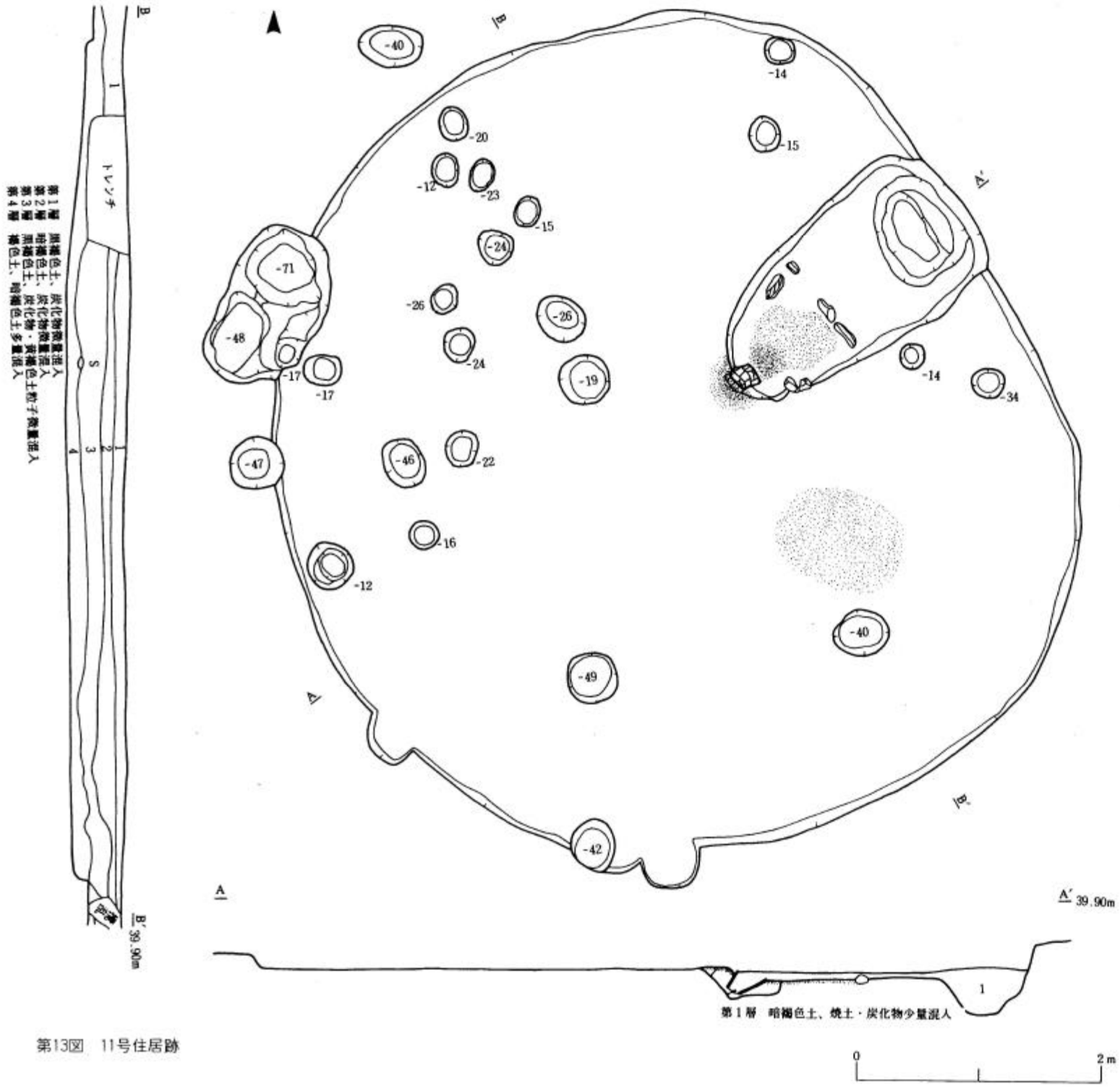
13号住居跡（第15図）

調査区南東部で検出された。

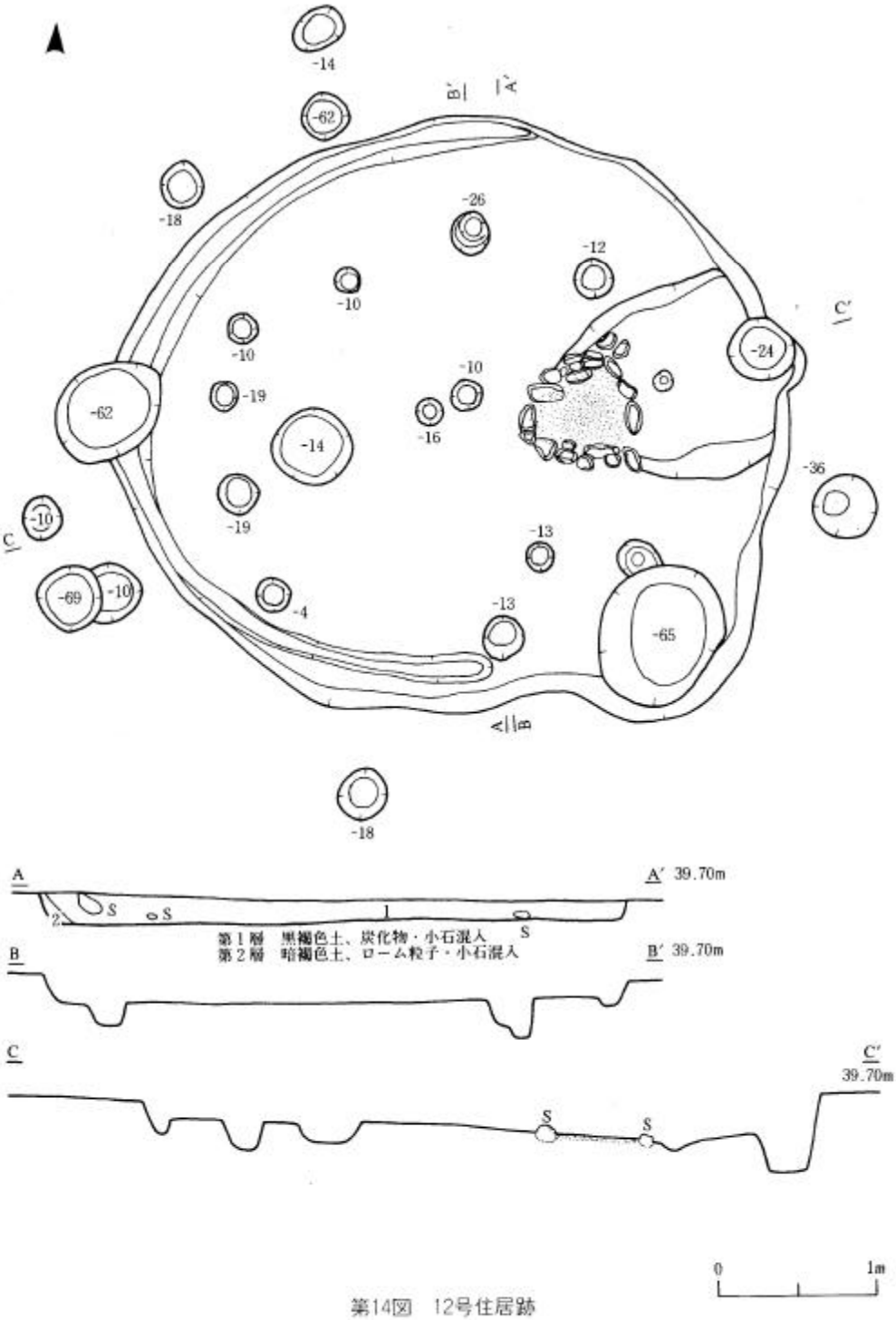
プランは径2.6ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。


A
A′
B
B′
C
C′
-58
-30
-40
-39
-73
-39
-20
-14
-19
-17
-18
-19
-55
-19
-42
-22
-30
A′ 39.60m
B′ 39.60m
C′ 39.60m
第1層 黒褐色土、粘性有り、焼土少量・炭化物多量混入
第2層 黒褐色土、炭化物少量混入
第3層 黒褐色土、やや硬くしまっている、褐色土多量混入
第4層 褐褐色土、黒色土・炭化物混入
0
2m

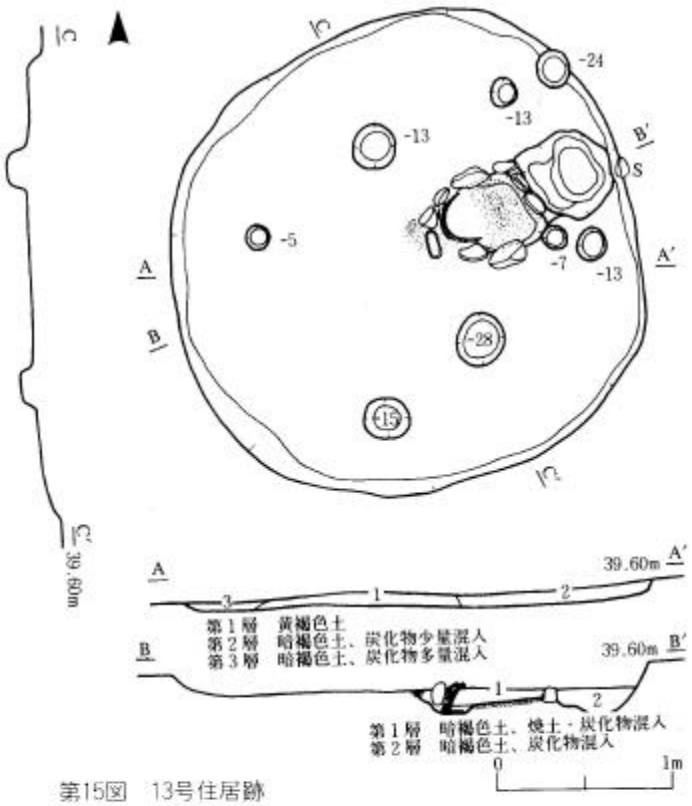
第12図　10号住居跡


B
トレンチ
1
S
2
3
4
B' 39.90m
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物少量混入
第2層　暗褐色土、焼土・炭化物・黄褐色土粒子微量混入
第3層　暗褐色土、焼土・炭化物少量混入
第4層　褐色土、暗褐色土多量混入
-40
-14
-20
-15
-12
-23
-15
-24
-71
-26
-26
-48
-24
-17
-17
-19
-14
-34
-47
-46
-22
-16
-12
-40
-49
-42
A
A' 39.90m
1
第1層　暗褐色土、焼土・炭化物少量混入
0
2m

第13図　11号住居跡


-14
-62
-18
-26
-12
-10
-10
-10
-19
-62
-14
-16
-24
-36
-10
-19
-13
-69
-10
-4
-13
-65
-18
A
A′ 39.70m
S
S
2
S
第1層　黒褐色土、炭化物・小石混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子・小石混入
B
B′ 39.70m
C
C′
39.70m
S
S
0
1m

第14図　12号住居跡



第15図　13号住居跡

ピットは8個検出され、4個が主柱穴と考えられるが、比較的浅い。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込み部からなる。石囲土器埋設部は縦に半截した深鉢形土器を斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は側面に石を組み、底面及び石が火熱を受けている。掘り込み部は若干深く掘り込まれ、壁に接する。床は平坦である。

出土遺物

土器（第22図16）

16は炉埋設土器である。胴部が膨らむ深鉢形土器で、LR単節斜縄文（縦位回転）を施す。

石器（第28図24）

24は縦型の石匙で、つまみ部にアスファルトの付着が認められる。

14号住居跡（第16図）

調査区南東部で検出された。

プランは長軸4.9m、短軸4.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは17個検出され、深い掘り方のものが主柱穴と思われるが規則的でない。炉は地床炉で、若干くぼんでいる。住居長軸線上西側に径90cm、深さ60cmのピットが認められる。床は平坦で、堅い。

出土遺物

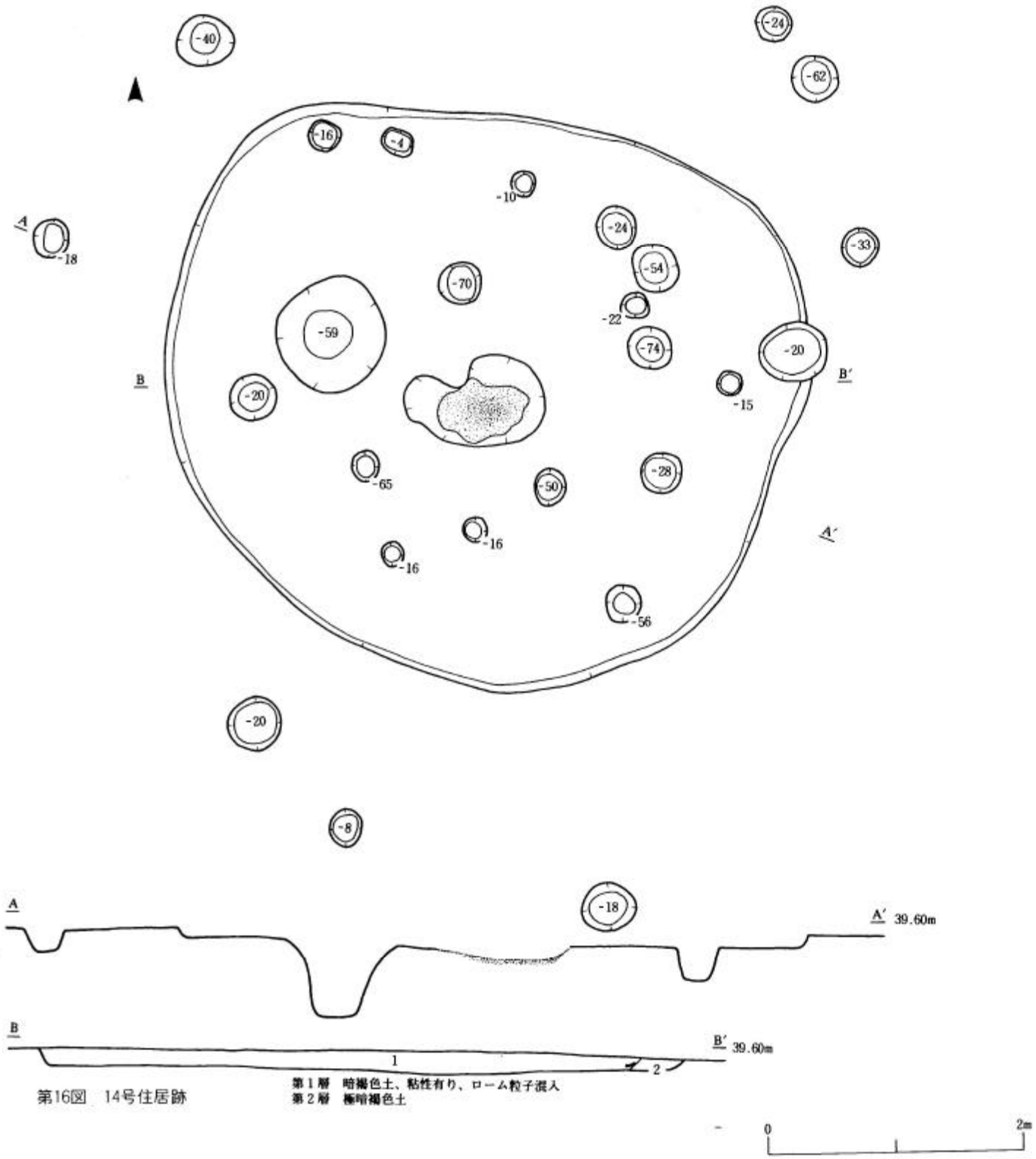
土器（第25図72～74）

72・74はピット、73は覆土出土である。いずれも縄文地文のみである。

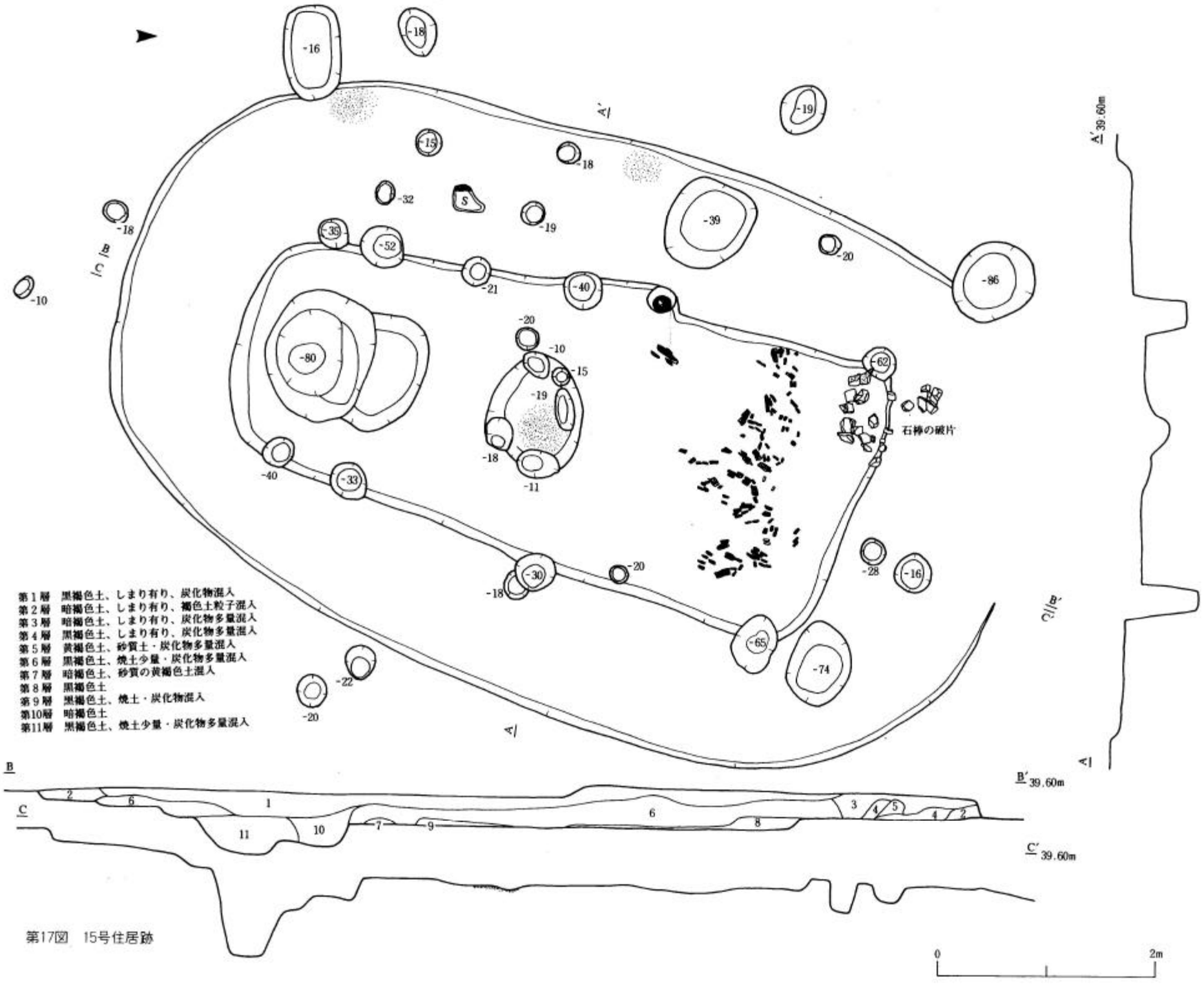
15号住居跡（第17図）

調査区南東部で検出された。

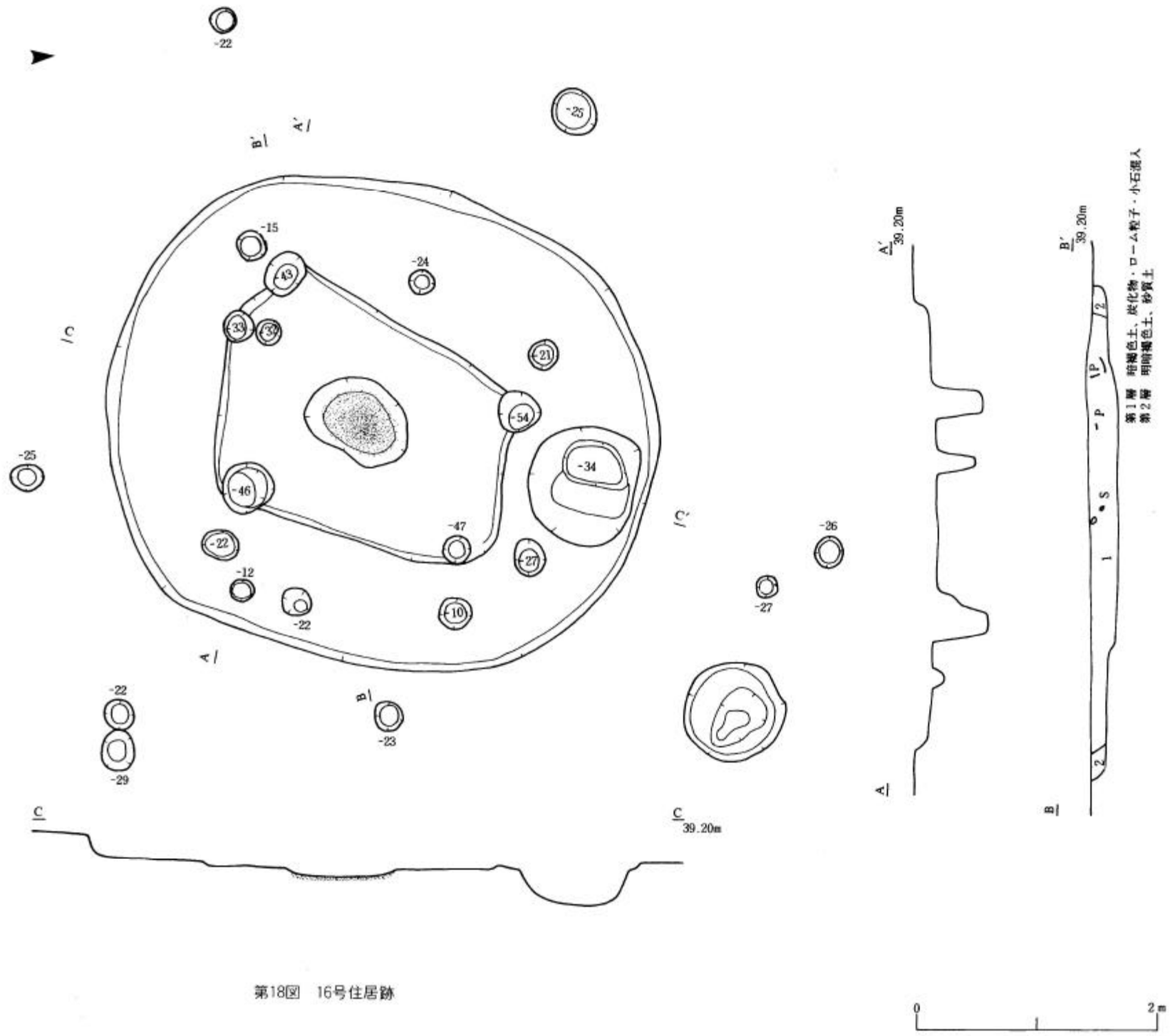
プランは長軸8.5m、短軸5.2mの小判形を呈し、床は2段構造である。確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されたが、床の段に沿った深い掘り方の6個が



第16図　14号住居跡


A
A'
B
B'
C
C'
39.60m
S
石棒の破片
第1層　黒褐色土、しまり有り、炭化物混入
第2層　暗褐色土、しまり有り、褐色土粒子混入
第3層　暗褐色土、しまり有り、炭化物多量混入
第4層　黒褐色土、しまり有り、炭化物多量混入
第5層　黄褐色土、砂質土・炭化物多量混入
第6層　黒褐色土、焼土少量・炭化物多量混入
第7層　暗褐色土、砂質の黄褐色土混入
第8層　黒褐色土
第9層　黒褐色土、焼土・炭化物混入
第10層　暗褐色土
第11層　黒褐色土、焼土少量・炭化物多量混入
0
2m

第17図　15号住居跡



第18図　16号住居跡

主柱穴と考えられ、段の西側中の柱穴には炭化した柱が認められた。炉は地床炉で若干くぼんでいる。住居長軸線上南側には径１ｍ、深さ70cmのピットが認められる。床は平坦で、堅い。床面北側には細かく砕かれた石棒の破片や炭化材が散在していた。12号建物跡と重複する。

出土遺物

土器

縄文地文のみの土器片が数点出土しただけである。

土製品（第93図１）

土偶で、ほぼ完形品である。目は鋭く、乳房が貼付され、腹部は膨らむ。体の両面に沈線と半截竹管状工具内面による連続爪形文を施す。

石器（第28図25～27、第29図32、第61図48・49）

25～27は磨製石斧である。25・26にはアスファルト状の付着物が認められる。32は石棒である。全長108ｍ（推定）、最大径15cmで全面を良く磨いている。頭部は鍔状をなし、頭頂部は丸味をもつ。体部は１面が平坦面で、中程は楕円形、端部は方形を呈する。平坦面の頭部に近い部分に、長さ14cm、幅5.5～6.5cm、深さ2.5cmのえぐりがみられる。部分的に黒く光沢のある付着物が認められ、焼けた痕跡と考えられ、割れ口にもみられる。石質は流紋岩である。47・48は磨石で、47は全面が磨られている。

16号住居跡（第18図）

調査区南東部で検出された。

プランは長軸4.6ｍ、短軸４ｍの隅丸長方形を呈し、床は２段構造である。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは14個検出され、床の段の４隅にある４個が主柱穴と考えられる。炉は地床炉で若干くぼんでいる。住居長軸線上北側には径１ｍ、深さ25cmのピットが認められる。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第22図17、第26図75～83）

全て覆土出土である。粘土紐貼り付け及び撚糸を圧痕するもの、半隆起線で文様を作り出すものである。17は口縁部が直立する鉢形土器で、口径8.2cm、器高15cmである。口縁部は、縦に貼られた１本の粘土紐と、縦位への刻み目、半隆起線文からなる。胴部は、直線・「Ｕ」字状の半隆起線文と縦位の刻線で文様を構成する。

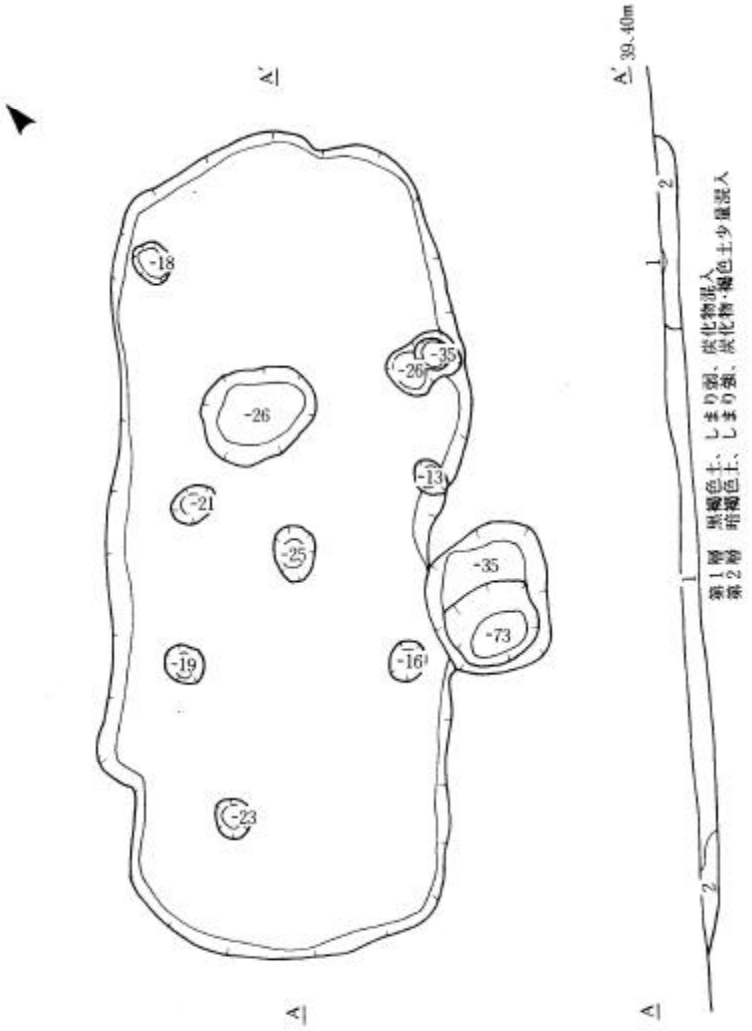
石器（第28図28～31）

28は無茎の石鏃で、アスファルトが付着する。29・30は石錐、31はヘラ状石器である。

1号竪穴状遺構（第19図）

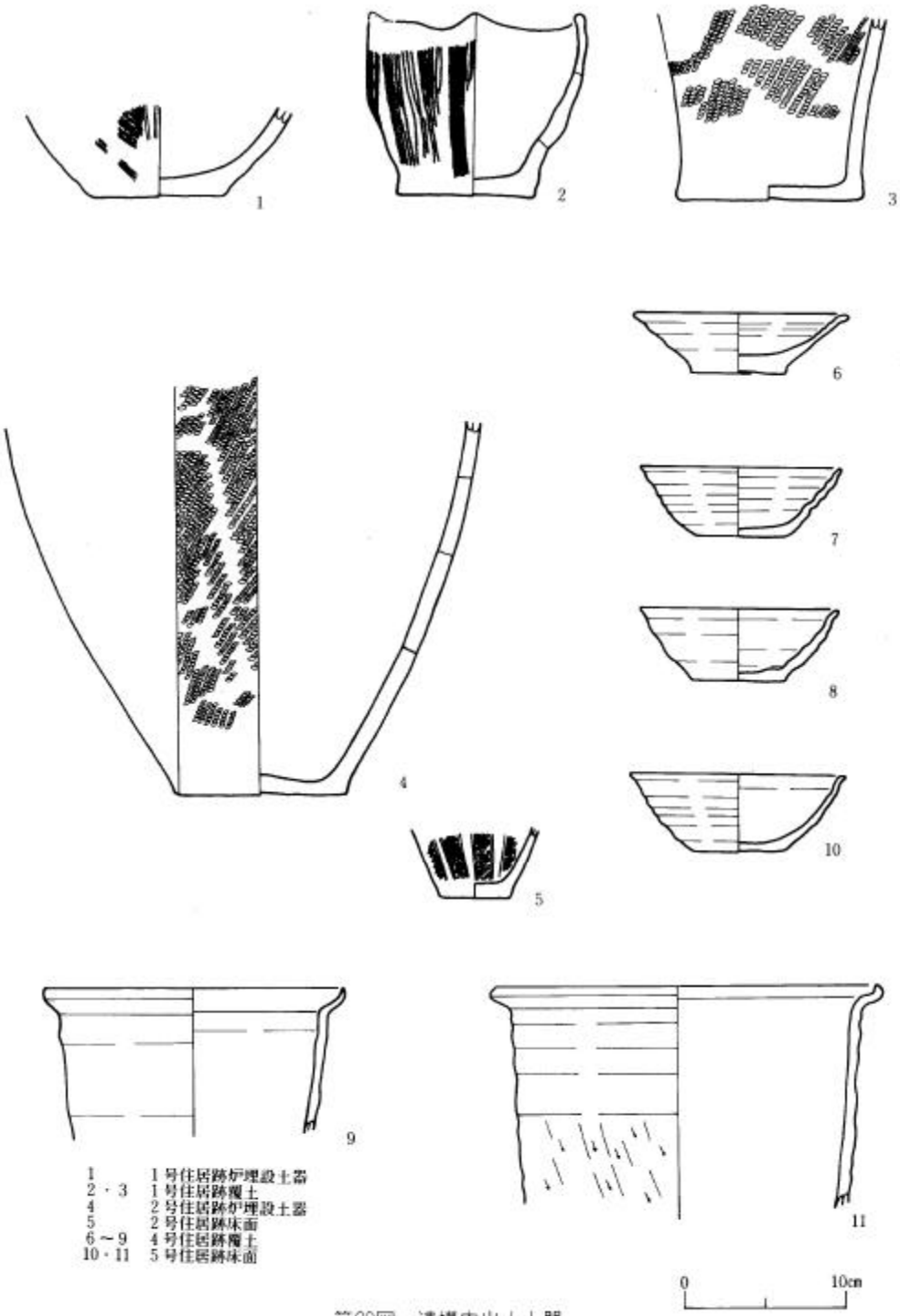
調査区南側で検出された。

プランは長軸4.7ｍ、短軸２ｍの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは13cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出されたが規則的でない。底面は平坦である。



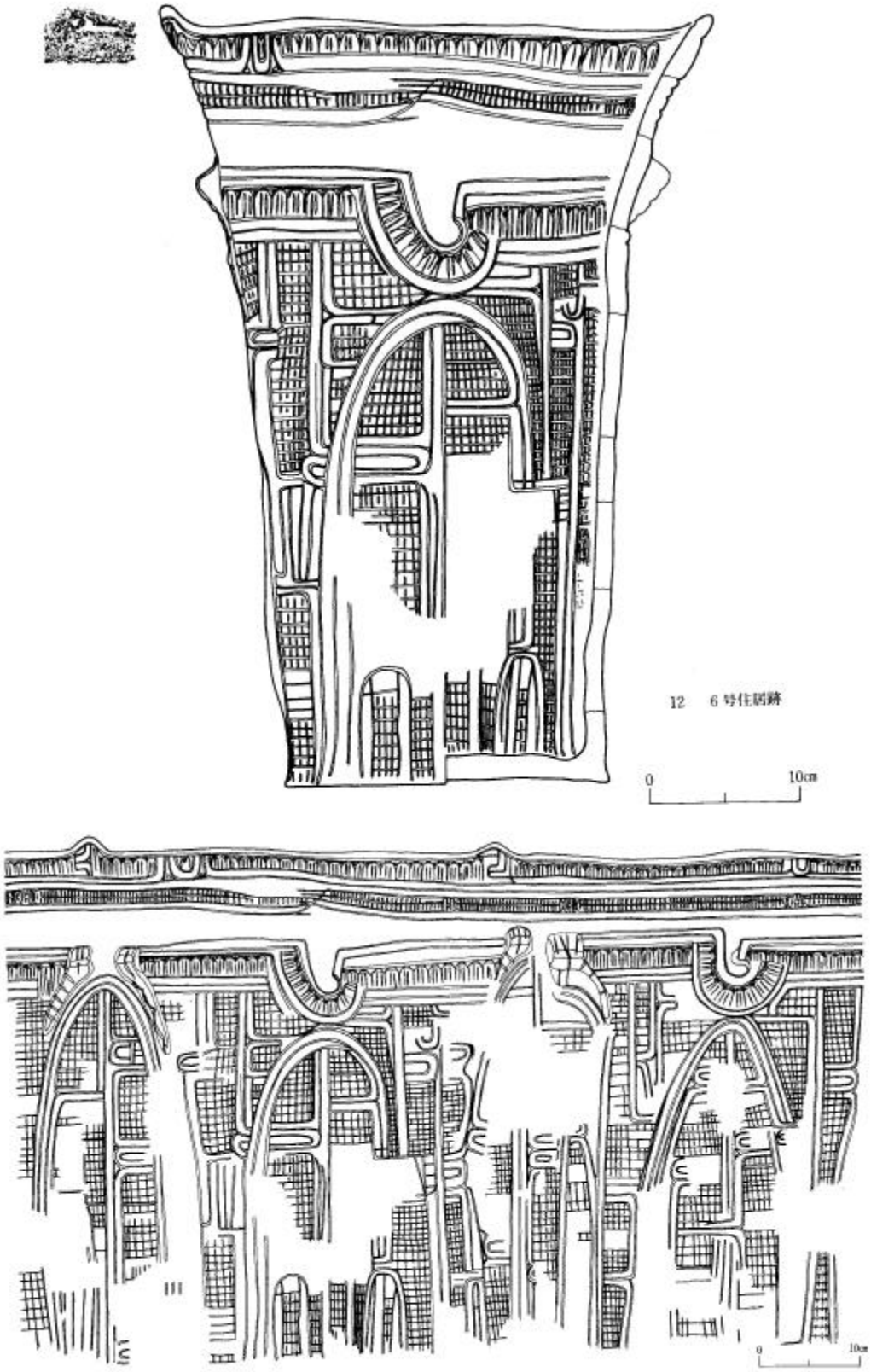
第19図　１号竪穴状遺構

0　1m

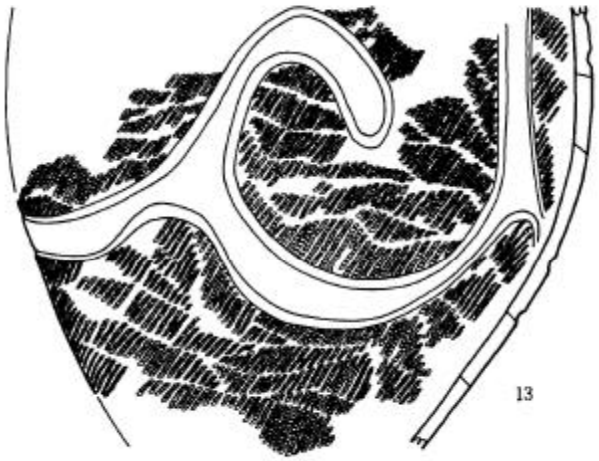


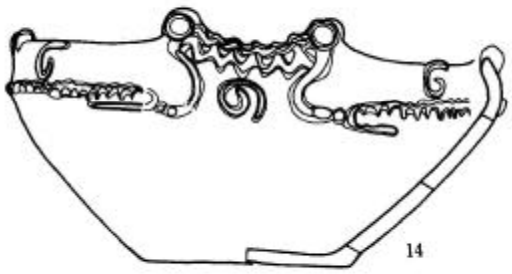
1　　1号住居跡炉埋設土器
2・3　1号住居跡覆土
4　　2号住居跡炉埋設土器
5　　2号住居跡床面
6～9　4号住居跡覆土
10・11　5号住居跡床面

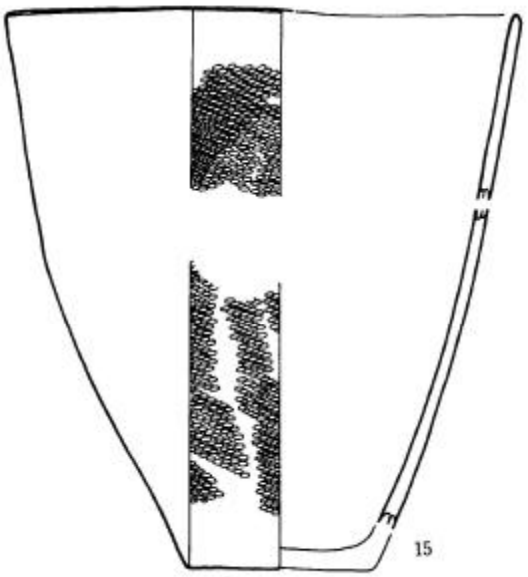
第20図　遺構内出土土器

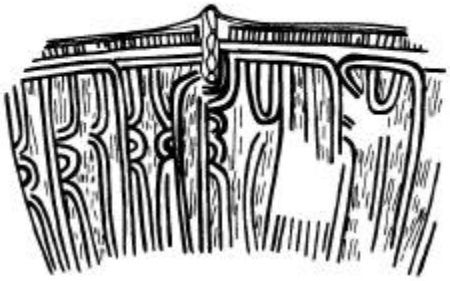


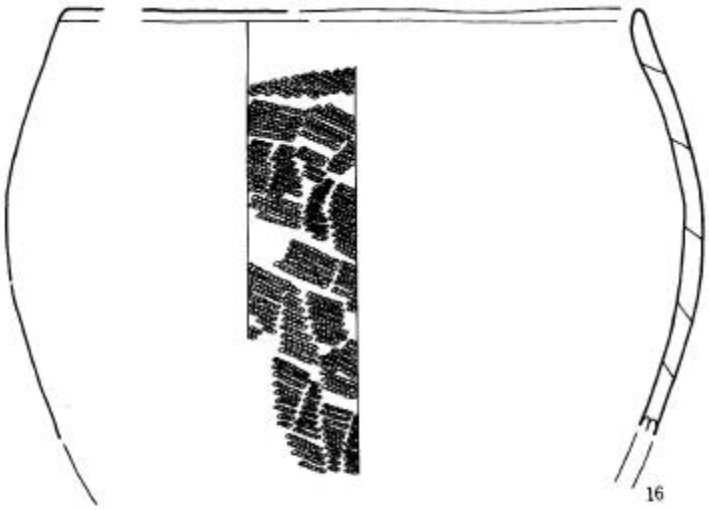
第21図　遺構内出土土器







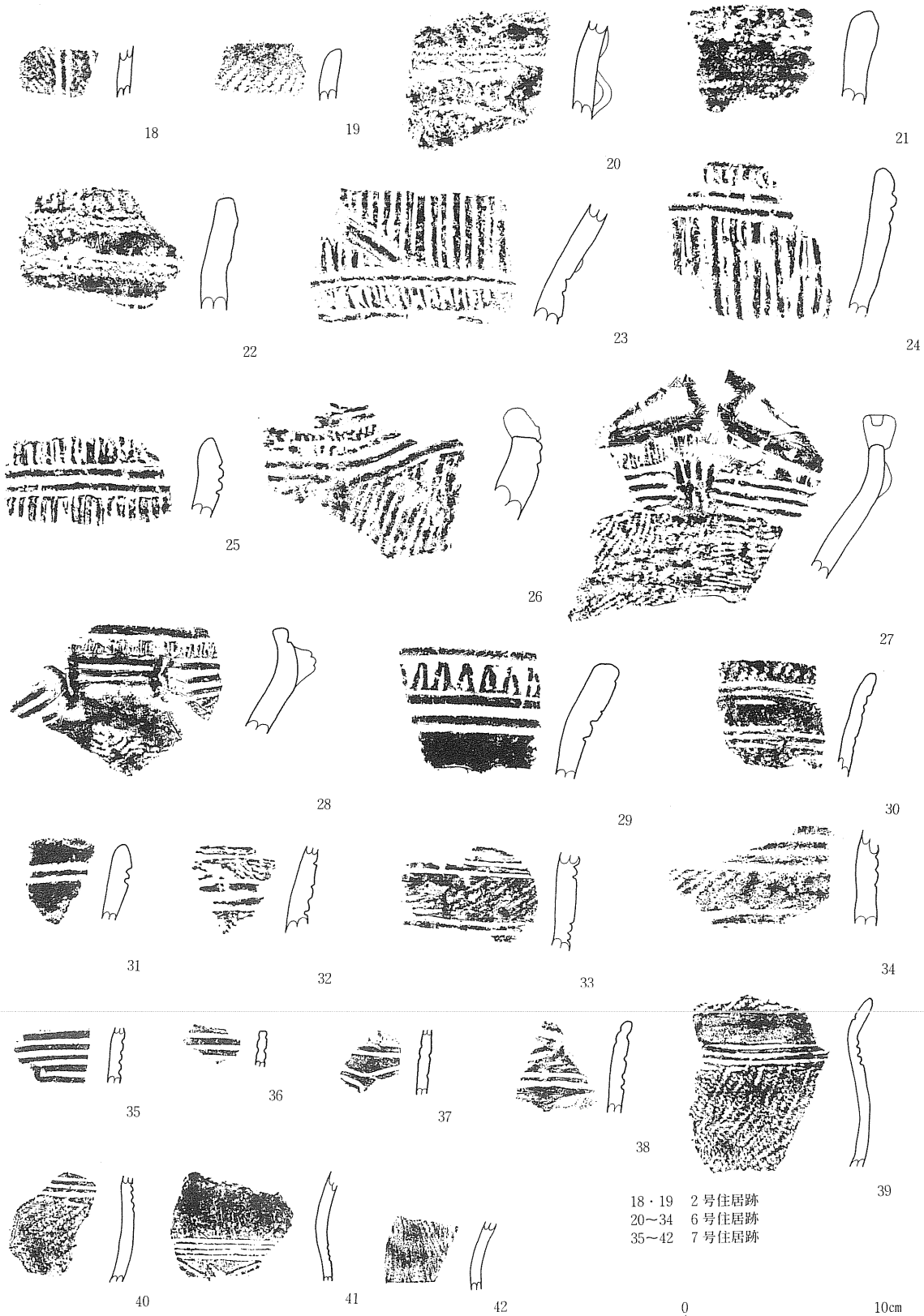




13　9号住居跡炉埋設土器
14　10号住居跡床面
15　11号住居跡炉埋設土器
16　13号住居跡炉埋設土器
17　16号住居跡覆土

第22図　遺構内出土土器

0　10cm



18・19　2号住居跡
20～34　6号住居跡
35～42　7号住居跡

第23図　遺構内出土土器